

筑波大学社会・国際学群国際総合学類
卒業論文

マサイの選択
-タンザニア・エンデュレン地区における宗教と近代化-

2018 年 1 月

氏 名：野入陸矢
学籍番号：201410399
指導教員：関根久雄教授

目次

第1章 序論	1
1. 研究の目的	1
2. 研究方法および章構成	5
第2章 先住民族と途上国開発	6
2. 先住民族と開発	8
3. 先住民としてのマサイ族	9
第3章 マサイ族の文化と歴史	10
1. マサイ族とは	11
(1)歴史	11
(2)生活様式	12
2. マサイ族の伝統と社会	14
(1)社会構造	14
(2)通過儀礼	16
(3)ウシの民	18
(4)宗教	18
3. 現代のマサイ族	19
第4章 エンデュレンにおけるキリスト教と近代化	20
1. 調査対象地の概要	20
2. 調査方法及び調査対象者	23
3. エンデュレンにおける近代化	27
4. エンデュレンにおけるキリスト教の役割	29
(1)Endulen Catholic Mission	30
(2)Free Pentecost Church Tanzania	32
5. エンデュレンにおけるカトリック教会とペンテコスタ教会に関する考察	34
(1)マサイ族文化に対する寛容度	34

(2)学校教育に関する見解	36
(3)教会に対する住民の戸惑い	38
6. マサイの選択 ―伝統文化と近代化の葛藤―	40
7. 「マサイ的近代化」の模索	41
第5章 結論	43
注	46
参考文献	49
Summary	52
謝辞	53

表目次

表 1	国際連合が 1983 年に定めた「先住民」の定義	7
表 2	ンゴロンゴロ地域の歴史.....	9
表 3	エンデュレン及び周辺地域における公立小学校の現状	22
表 4	インタビュー対象者一覧.....	23
表 5	Endulen Catholic Mission の礼拝時間及び使用言語	30
表 6	エンデュレンにおけるカトリック教会とペンテコスタ教会の活動と開始年 ...	39

図目次

図 1	マサイランドの地図	12
図 2	マサイ族の伝統的な作りの家	14
図 3	割礼の儀礼を終えて青年になる前の少年	19
図 4	エンデュレンのマーケットの様子	21
図 5	「マサイ族文化に変化をもたらしているものは何か」 回答	28
図 6	エンデュレンのカトリック教会外観	29

第1章 序論

1. 研究の目的

世界銀行によると、現在、世界に存在する先住民族は約3億7,000万人いるとされ、五大陸70カ国以上の国々に住んでいる。世界総人口の4%にも満たない彼らの生活は基本的な生活様式から、伝統儀礼、言語や宗教に至るまで多様な側面で変容を遂げ、なかには消滅の危機に直面している民族も存在するという。綾部は民族を分類する上で最も重要な基準となるのは言語であり、6,000種から7,000種存在する言語のうち約90%が21世紀中に消滅するか、消滅に向かい始める〔綾部 2007:4〕と指摘し、多数の民族文化が減少の傾向にあることを危惧している。

一般的に、先住民、また先住民族とは、欧米人がやってくる以前からその土地に住んでおり、独自の社会や文化、アイデンティティを形成・保持し、現在は国家の中で少数派の立場にある人々を指す〔岸上 2009:14〕が、グローバル化やそれに伴う近代化が進む社会でその文化を変え、もしくは変えさせられ、これまでとは異なる生活を営んでいる先住民も存在する。このような背景から、各機関や団体によって先住民、及び先住民族の定義の仕方は異なる。生活様式に変化が起きた一つの要因に欧米を中心とした資本主義経済システムの拡大がある。これまで貨幣以外のものに価値を見出しモノの取引を行っていた社会が西洋的な経済システムに接合されることにより、人々が現金収入を得る必要性が高まり、その結果多くの先住民が都市部へ流入し、近代的思想や文化に触れる機会も増えた。

先住民族が外部の文化や風習に影響を受けるもう一つの要因に、開発が挙げられる。開発とは、生活の質の向上や生産性の増大を求めて、現状に社会的、経済的に介入する活動〔岸上 2009:14〕のことを言い、主に「途上国」とされる地域を対象に行われる事例が多い。開発活動は国際的に政府や、民間企業、NGOなど複数のアクターによって現地のニーズに合わせて行われているが、外部から持ち込まれた技術や生産システム、思想、宗教といったものがマイナスの効果として現地住民に影響を及ぼすケースも少なくない。

先住民と先住民族の用語の定義については一般的に前者が個人や総称を指す場合に用いられ、個々の集団を差す際には後者が使用される。一般的に先住民族が開発や近

代化の流れに組み込まれ、彼らの意思とは反する形で伝統文化の変化を強いられる時に問題が表面化する。それは、より合理的かつ効率的に開発プロジェクトを進めていく過程で先住民族に限らずマイノリティとされる集団が長年直面している課題である。先住民が抱える以上のような現状を踏まえ、国際的な取り組みも行われてきた。

国際連合では、1982年に、先住民に関する作業部会(Working Group on Indigenous Populations: WGIP)⁽¹⁾が結成され、先住民宣言案が提出された。この宣言案を巡っては、1993年の「世界の先住民の国際年」、1994年から2005年の「世界の先住民の国際の10年」を通じて議論が続けられたが、採択には至らなかった。2005年から2014年が「第2次・世界の先住民の国際の10年」と宣言され、議論が継続されたのち、2007年に「先住民の権利に関する国連宣言(United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples)」が採択された[窪田 2009:2]。この宣言には文化、アイデンティティ、言語、雇用、健康、教育に関する権利を含め、先住民族の個人及び集団の権利を規定している。また、世界銀行も開発の過程における人々や環境への不当な害を防止・軽減することを目的としたセーフガード政策の中に先住民族の項目を設けており、同機関が行うプロジェクト対象地において先住民族の尊厳、人権、経済、文化を十分に尊重したものとなるよう努めている。

途上国開発が盛んになり、強制移住や同化政策など先住民族に与える直接的な影響が明らかになるとともに、国際的に彼らの生活や文化を保護する動きが展開された。先に述べた国連や世界銀行の取り組みと同じように国内の支援団体や援助機関も先住民族の文化保護や権利保護に関するガイドラインを設けている。しかし、彼らが抱える問題は外部との関わりだけに留まらない。新たな価値観や文化がコミュニティに流入し、人々の生き方が多様化することで同じ民族間で伝統文化に対する意見の不一致や衝突が生じ始めるのである。こうしたコミュニティにおける集団は大きく分けて西洋的思想や技術を駆使した新しい生き方を試みる革新派と、これまでの伝統を引き継ぎ外部のものを極力受け付けない保守派に分けることができる。

伝統文化と西洋的近代化の狭間で暮らし、今まさに民族内で文化の継承をめぐる議論が交わされている集団の1つにマサイ族がある。マサイ族とは主に東アフリカ地域のケニア南部とタンザニア北部に居住している遊牧民族である。その特徴的な民族衣装と儀礼の際に行うジャンプ、そして優れた身体能力の高さから世界中で有名な民族の一つとなり、今や観光の対象ともされている。Summitt は先住民族の文化に影響を

与えるものは様々であるが、マサイ族のコミュニティにとって最も「脅威」となるのが学校教育、テクノロジー、そして観光業であると指摘している [Summitt 2002:63]。グローバル化の加速とともに、それらの要因はマサイ族社会に流入し、対応が追いつかず、西洋的な価値観に伝統文化が流されてしまうため、「脅威」として見なされた。しかし、筆者はこれらの西洋的な文化に基づいた技術やシステムはマサイ族にとって「脅威」になると同時に、現代の時代を生き抜くための「解決策」ともなりうると思う。その理由を以下に述べる。

教育やテクノロジーは時代の流れとともに自然とコミュニティ内に入り込み、地域に根付いていった。マサイ族社会にとって教育とは元々、個人に対して伝来の文化慣習、哲学、価値体系を教え、マサイ族社会に統合する事を目的としていた [Phillips 2002:141; Omolewa 2007:596]。自らの親やコミュニティ内の長老との関わり、儀礼、口頭伝承を通して「マサイ族」としてのアイデンティティを確立させ、社会全体の利益と文化の維持を図ってきた。しかし、世界的には 1990 年代から「万人のための教育 (EFA)」⁽²⁾の考えが広まり、マサイ族が居住するタンザニアとケニアの両方でも 2000 年ごろに初等教育の無償化、ならびに義務化が実施され、多くの児童が学校教育を受けるようになった。学校教育は伝統的教育とは異なり教科書を用いて教師が生徒に授業を行うものであり、英語や東アフリカ共通言語のスワヒリ語の授業のほか、算数、理科、社会もカリキュラムに組み込まれていた。伝統教育に重きを置いていたマサイ族社会にとって西洋的な学校教育は、これまでとは異なる価値観や思想を子供に植え付け、継承されてきた文化を変化させる「脅威」としても捉えられている。しかし、学校教育を受けることによって、新たに言語を修得することや基礎的な学問を学ぶことで外部との交渉を図ることができ、一方的に被害を被ることを回避することも可能となる。また、学んだ内容を農産物の生産性向上や家畜管理など日々の生活に応用させることで、学校教育と伝統文化を結びつけることもできる。

テクノロジーに関しても携帯電話やプラスチック製品などこれまでコミュニティに存在していなかったものが、人々の生活により身近なものとなった。ペットボトルなどのプラスチック製品はこれまで動物の角や胃袋を容器として利用してきたマサイ族にとって簡易的かつ耐久性の高いものとして幅広く普及している。また、携帯電話の利用者も増え続け、離れた知り合いに電話を使って連絡を取ったり、海外のニュースを携帯で読むなど、マサイ族の姿は外部からもたらされたテクノロジーによって変わ

ってきている。街灯がない暗闇の中を携帯電話の明かりをもとに移動する人々の姿も珍しくない。

タンザニア観光における最大の資源は大自然で、中でも野生動物観光（サファリ）である。「国全体の GDP の中で観光業が占める割合は 1 桁と大きくないが、関連産業・雇用への波及効果は大きい。外貨獲得という点では 1999 年に伝統的輸出品であったワタ、コーヒーなどを抜き、2013 年にはそれまでトップであった鉱業を抜いて観光業が同国における外貨の稼ぎ頭となった〔根本 2015:118-119〕」。さらなる産業発展に向け、国が主体となり自然保護区の指定や国立公園の設立を図ったため、以前から自然が豊富な地域に居住していたマサイ族は、強制移住や、自然保護を目的として定住化を強いられたり、農耕の制限を設けられたりと、人々の生活に大きな影響をもたらした。しかし、近代化とともに貨幣経済社会に統合されていく中で現金収入を得られる観光業はマサイ族にとって効率的かつ効果的に資産を増やす新たな手段となっている。マサイ族が行う観光には様々な種類があるが、一般的なものとしてツアー会社と集落が連携し、観光客が訪れるたびに行う伝統的なダンスの披露や手作りのお土産販売で収入を得ている。自らの文化を「商品化」する過程で伝来の意味を失ってしまう弊害もある一方で、ダンスの踊り方や伝統工芸品の作り方が形を変えずに継承され、「文化の再構築」が行われる。

これまで議論されてきたマサイ族社会における先住民族問題は、学校教育の義務化や観光開発など強制的にコミュニティに当てはめてものが多く、住民に選択の余地が与えられなかったため「脅威」とみなされてきた。外部から流入したこれらの新たなシステムと「共存」していく過程でマサイ族は「解決策」としての価値を見出してきたのである。そしてその行程は社会全体でなされてきた。しかし、現在のマサイ族社会では、個人が、そして個々のコミュニティがいかにしてマサイ族社会に外部のものを適応させていくかの選択を迫られているのである。その要因となるのが宗教、とりわけキリスト教である。

「キリスト教は 1903 年にマサイランドに流入し〔Republic of Kenya 1990:115〕」、その後徐々に広がりを見せていった。キリスト教の影響は他の外的要因に比べて、その変化の様相を可視化しづらい。宗教は人の生き方そのものを内面から変える力を持ち、価値観さえ変えてしまう。マサイの村においては外部から入ってきたキリスト教が土着化していく過程で、その教えを伝統文化とどう結びつけるかという点において内部

で意見が分かれているのが現状である。伝統儀礼の慣習を守るのか、キリストの教えに沿ってこれまで行ってきた伝統的な暮らしのあり方を変えるのか。キリスト教の広まりとともに西洋的な近代化を歩むのか、それとも新たな価値観を土着化しマサイ族独自の「近代化」を歩むのか、彼らは大きな選択を迫られている。

そこで本稿ではタンザニア北部エンデュレン地区の事例をもとに、キリスト教がいかにしてマサイ族のコミュニティに入り、地域住民に受け入れられていったのか、そしてその影響としてマサイ族が選択する近代化の道を考察することを通じて、西洋的価値観をもたらす途上国開発及び近代化と先住民文化の間に生じる葛藤を明らかにし、その課題に向けた解決策の糸口を提示することを本稿の目的とする。

2. 研究方法および章構成

近年見受けられる開発と先住民族に関連する国際的な取り組みや、本稿の調査対象であるマサイ族の近代化について学術論文、ウェブサイト等から明らかにする。また、マサイ族が人口の9割以上を占め、近年キリスト教信者が増加傾向にあるタンザニア・エンデュレン地区を研究対象地域とし、同地域で筆者が2017年9月8日から9月28日までに行ったインタビュー形式のフィールドワークのデータを分析、考察することを通じて対象地域におけるキリスト教の影響と今後必要とされる開発のあり方や、地域の発展について考察する。

以下に章構成について述べる。第2章では、複雑化している「先住民、先住民族」の定義を国際連合機関やその他国際機関の動向を踏まえた上で整理し、本稿における定義を定めた上で、一般的な途上国開発と先住民の課題について述べる。第3章ではマサイ族の歴史と伝統的な文化の詳細に触れ人々がそれぞれの行いに見いだすものを明らかにする。第4章ではタンザニア北部のエンデュレンにおけるフィールドワークをもとに、同地域における近代化とその要因、今後の課題について議論をする。第5章は結論としてこれまでの議論を整理した上で、現代における先住民族が抱える問題について明らかにし、その解決策の糸口を提示する。なお、本文中に記載してある名前はすべて仮名とした。

第2章 先住民族と途上国開発

1. 先住民の定義

全世界で3億人以上存在するとされる先住民であるが統一された定義は示されていない。先住民族を定義づけることは彼らの権利や生活を保護する上で必要とされる条件となりうるが、先住民族とそうでない人々の間に明確な境界線を定めることは一部の民族をその枠組みから排除することにもつながり、各種制度の適用範囲を制限してしまう。上村は先住民族を近代国家との関係性から以下のように定義付けている。

近代国家が「国民形成」の名目のもとで、「野蛮・未開」とみなした民族の土地を一方的に奪ってこれを併合し、その民族の存在や文化を受け入れることなく、

様々な形の「同化主義」を手段としてその集団を植民地支配した結果生じた人々が「先住民族」と呼ばれうる民族的集団である〔上村 2011:11〕。

この定義は北米や太平洋の一部地域において有効であるが、その他の多民族国家を目指した国や地域において「国家形成」の段階から権利を保護されてきた先住民族が対象とされない。また、国際連合も1983年に提出された「先住民への差別問題に関する調査報告書」の最終報告における先住民の定義を採択し、国際連合先住民作業部会を設置した。その定義が以下の通りである（表1）。

表1 国際連合が1983年に定めた「先住民」の定義

1	先住の諸共同体、人々、諸民族とは、侵略及び植民地化以前に自身のテリトリーにおいて発達してきた社会との、歴史的な連続性を有し、これらのテリトリー、あるいはその一部において現在優勢を占めている、社会の別の構成部分と、自分たちを区別して考えている人々である。彼らは現在、社会の非支配的な部分を構成しているが、自分たちの継続的な民族としての存続を基盤として、伝来の土地と民族的（エスニック）なアイデンティティを、自身の文化様式、社会制度、法制度に従いながら、維持し、発展させ、将来の世代へと引き継ぐことを決意している。
2.	この歴史的な連続性には、以下の諸要素の一つあるいは複数の、現在までの長期に渡る継続が含まれる。 a) 先祖伝来の土地の、全部あるいは少なくとも一部の占有。 b) これらの土地の元来の占有者を祖先として共有すること。 c) 一般的な意味での、あるいは特定の表現（宗教、部族制度での生活、先住民共同体の成員、衣服、生計の手段、生活様式、その他）における文化。 d) 言語（唯一の言語であるか、母語であるか、家庭あるいは家族との会話の習慣的手段であるか、主要な、好んで、慣習的に、一般的あるいは通常もちいられる言語であるかを問わない） e) 国の一定の部分、あるいは世界の一定の領域での居住。 f) その他関連する要素。

（国際連合ウェブサイト⁽³⁾より筆者作成）

国際連合が採択した先住民に関する定義においてこれまでの議論と異なる点は、先住民の主観的な要素が考慮されている点であった。自らを先住民と捉え、その文化的要素や土地を次の世代に伝える決意のある、またはそのような社会に暮らす人々は「先住民」と位置付けられる。つまり、「自己認識」が先住民族か否かを判断する際に重要な基準となるということである。

その後、国際労働総会において1989年に先住民族の労働における権利保護と生活様式を尊重する内容が組み込まれた「先住民族及び種族民に関する第169号条約」が採択された。この条約において、先住民族は明確に定義されず、定義の適用範囲を定

めることに留まっていることから、定義の確立化が排他性や限定性を考慮した際に困難であることがわかる〔トメイ・リー 2002:22〕。また、2007年に国際連合総会で採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」においてもその定義は明確に示されることはなかった。これらの議論を踏まえ、定義の持つ排他性、限定性、そして「自己認識」という観点を考慮した上で、本稿においては先住民及び先住民族を「社会を構成する大多数の他の集団と自らを区別して自らを先住民であると自己認識し、伝来の言語、土地、風習、文化を次の世代に継承する意思のある個人または集団」と定義する。

2. 先住民族と開発

第2次世界大戦終戦後、植民地支配を受けてきた国々は旧宗主国からの独立を徐々に果たしたが、日本やドイツなどの旧枢軸国⁽⁴⁾の工業化に伴う経済発展や、他の欧米諸国における技術革新による産業の効率化により経済格差が生まれ、南北問題⁽⁵⁾が表面化されていく過程で発展途上国へと移行した。国際連合総会が1960年代を「国際連合開発の10年（*United Nations Development Decade*）」とすることを提唱したことで途上国開発への関心は広まっていった。日本でも1954年のコロンボ・プラン⁽⁶⁾参加を起源に60年以上にわたって援助国としての役割を担っている。また、1989年にODA実績総額において、初めて世界で1位を占めた後は1990年を除く2000年に至るまでその地位を維持していた〔菊池 2001:48〕。

このように海外の主要国のみならず日本も途上国開発に力を注いでいることが明らかである。しかし、開発援助によって新たに生じた問題もいくつか存在する。灌漑施設やダム建設などの水に関わる開発によってもたらされる生態系の変化、感染症の蔓延、環境破壊など本来の開発の副作用的な側面が取り組むべき課題である。そしてまた、開発と先住民族との関わりもその一例である。

例えば遊牧民が大多数を占める東アフリカ地域の先住民はかつて、地位社会における自律的・優位的な存在であった。独自の手法で様々な気候や土地環境に応じた農業活動を行ってきた彼らが、1980年代の初頭に発生した東アフリカ地域での干ばつの影響を受けると、遊牧民を対象とした大規模な開発援助企画が国際機関や各国政府によって展開された。世界的な取り組みが成された背景には遊牧民の既存の畜産技術を時代遅れと決めつけ、近代化を目指す国際機関と、特定の土地を私有せずに移動生活を

送る遊牧民を国家の政治・経済システムに統合させたいという各国政府の思惑があった [孫 2012:8]。

その他にも、世界各地で開発の洗礼を受けている先住民族が存在する。コンゴはアマゾン流域について世界で最も広い熱帯雨林面積を有し、多くの人々が森林に依存しながら生活を送ってきた。ピグミー (*Pigmy*) はコンゴの熱帯雨林に暮らす先住民族の1つであるが、近年、資源確保のために多くの森林が伐採され、住む場所を失っている。林業の拡大は国際通貨基金 (IMF) の支援のもと国の政策として進められ、収益拡大のために自然資源部門が自由化され、主にヨーロッパへの木材の輸出が加速化した []。

先住民族が開発の「被害者」となるのは、その担い手が政府であれ、国際機関であれ変わらなかった。先住民族よりはるかに大きな組織による一方的な意思決定で土地を追われ、時にはビジネスの道具として扱われてきた一部の民族は抵抗するすべもなく、そのまま衰退、消滅する危機にある。

3. 先住民としてのマサイ族

マサイ族も先住民という立場から政府や外部からの一方的な開発の影響を受けてきた。マサイ族は主にケニアとタンザニアを居住地としているが、以下では、本稿で取り扱うタンザニアにおける「先住民としてのマサイ族」の姿を明らかにする。

伝統的にマサイ族は気候の変動に応じるかたちで、家畜を連れながら移動を繰り返し、牧畜と軽度の耕作を営んできた。1年の中で乾季と雨季が分かれる気候の中で、家畜に必要な草を得るために定住せず、遊牧することが、1番効率良かったのである。しかし、自然保護と観光開発の観点からマサイ族の暮らしは変化を余儀なくされた。タンザニアでマサイ族が主に暮らしているンゴロンゴロ地域において、どのような取り組みが行われてきたかを以下の (表 2) で示す。

表 2 ンゴロンゴロ地域の歴史

1928 年	ンゴロンゴロ地域で狩猟が禁止される
--------	-------------------

1929 年	セレンゲティ・ゲームリザーブが設立される
1951 年	ンゴロンゴロ地域がセレンゲティ国立公園の一部となる
1959 年	ンゴロンゴロ保護区が設立される
1975 年	ンゴロンゴロクレーター内での農耕禁止令が制定される
1979 年	ユネスコ世界自然遺産に登録される
1985 年	「ンゴロンゴロ保全および開発プログラム」が政府主導で発足する

(出所：EIC: Environmental Information & Communication Network⁽⁷⁾より引用)

マサイ族の居住地が国や国際社会によって保全地域や自然遺産に認定されることにより、移動や耕作の制限を課された。ンゴロンゴロクレーターには1年を通して豊富な水と動物が存在しており、マサイ族にとっても家畜にとっても貴重な場所であった。しかし、観光開発のため、家畜を連れてクレーターに侵入することは禁止され、食料確保のための狩猟もできなくなった。現在では、自然保護区内であっても国立公園の外であれば、家畜を放牧することが認められているが、日をまたいで遠方に出ることは許されず、出発したその日のうちに自分の村に戻らなければいけない

[Summitt 2002:70]。開発主体側は住民と協議を踏まえた上で観光開発を行っている」と主張するが、多くの場合言語が異なるため、まともな議論が行われず、開発主体である政府や企業の思惑通りに進められる。

このように歴史的に見てマサイ族は「先住民」として扱われ、一方的な開発による洗礼を受けてきた。先住民と開発主体はこれまで、問題が生じるとに妥協案として一定の権利を譲渡した、規制を緩和したりしてきた。しかし、現代における開発と先住民の問題は、様々な開発の担い手がプロジェクトを行う際にセーフガードを設け、人権や土地を侵害しないか慎重に行うため、これまで議論してきたような一方的な外と内の関係ではなくなっている。

第3章 マサイ族の文化と歴史

1. マサイ族とは

(1)歴史

マサイ族、またはマサイ(*Maasai*)とは、東ナイル系 (Eastern Nilotic) に属するマー (*Maa*)語を話し、自らのことをイルマーサイ (*Il-Maasai*)と称する人々のことである。ケニアからタンザニアにかけて約1万5千平方キロメートルに及ぶ、乾燥・半乾燥地が彼ら彼女らの主な居住地、いわゆるマサイランドである。「2009 年に行われたケニアの調査によれば、ケニア全体の人口が約3,860万人に対してマサイの人口は約84万2千人、全人口の約2.2パーセントを占め〔目黒 2014:112〕」、同国の中では少数派として位置付けられる。タンザニアにおいてもマサイの占める割合は全体の人口の1パーセントにも満たないほどである。

マサイの祖先は、かつてはトゥルカナ湖の北側、現在のケニアとエチオピアの国境付近に暮らす農牧民であったと考えられている。11世紀以降、南下する中で技術の革新と社会組織の発展、生活環境の変化を経験し、専門的に牧畜に専念することで十分な食料を確保できるようになった結果として、「ウシの民」としてのアイデンティティを持つようになった。その後も人口と家畜数の増加によりマサイの人々は、南へ領土の拡大を進め、現在よりも広大な土地を占領するに至った。18世紀にはケニア中部からタンザニア北部にかけての広大な地域をテリトリーとするようになったが、19世紀に入るとマサイランドは大きな災害被害に見舞われ、マサイ族は病気の蔓延や、氏族間の抗争に苦しめられた。このように弱体化している時期にイギリス政府がケニアに植民地政府を設置し、一部地域を白人入植者のための農牧地として利用するため、そこに暮らしていたマサイの人々はケニア南部へと強制的に移住させられた。それ以降マサイランドにおけるマサイ族独自の制裁権は主張できなくなった〔サンカン 1989:192;目黒 2014:111-114〕。近年では観光業の発展に伴い、政府が主体となってマサイランドの縮小および住民の定住化が図られている。

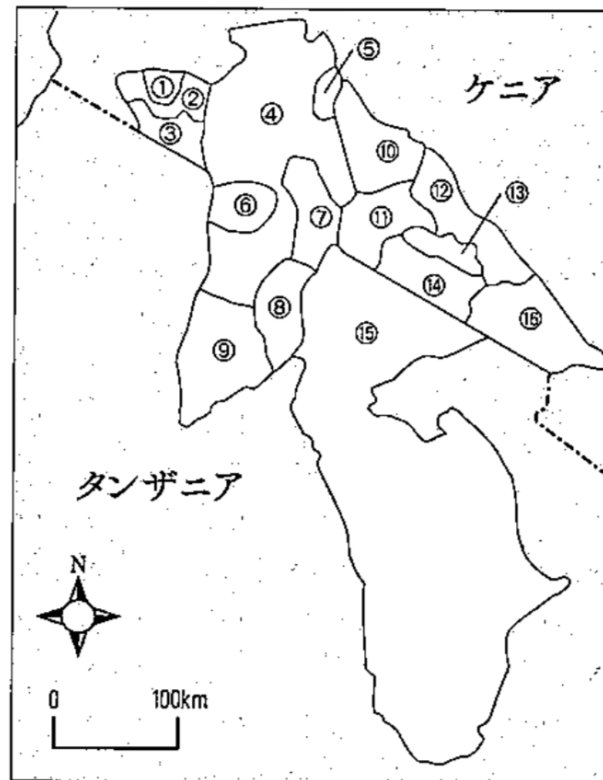


図1 マサイランドの地図

(出所：[Spencer2003:xvi] より筆者改編)

(2)生活様式

マサイの人々は基本的に伝統的なシュカ（*Shukaa*）と呼ばれる布をまとい、男女ともにアクセサリーを首や腕に身につけている。赤を基調としたチェック柄の大きな布を複数枚重ねて着用している人がほとんどだが、都市部に出稼ぎとして働きに出ている人や村の中でも教師や教会で働く人など西洋的な服装の上から簡易的に1枚だけ布をまとう人もいる。年代ごとに服装の特徴は分かれ、年配の人々のほとんどがシュカを3枚ほど重ね切る基本的な格好をして生活している。それに対して若者の中にはジーンズやパーカーと合わせて布をまとっている者もいる。また、学校に通う幼い子供たちは学校が指定する制服を着て日常を過ごしているため、伝統衣装に触れる機会が比較的小さい。

世代間で異なる服装をしている背景に西洋文化に対する見解の違いが考えられる。近年、顕著に見受けられるグローバル化に伴うヒト、モノ、カネ、情報の移動の加速化により、マサイ族はこれまで以上に西洋文化との接触が増えた。若者がこれらの文

化に対して憧れを抱いているのに対して、年配の人々は自分たちの文化が変化してしまうことを恐れ拒んできた。時には若者が西洋的な服装をしているのを見ると、呼び出して叱りつけるなど、マサイとしての「教育」を施してきた。また、教育機会の拡大とともに識字率やマー語以外の語学能力が向上し、より外の社会と接する場面が増加したことも異文化への反応が若者とその上の世代で異なる要因の1つである。

伝統的にマサイ族は牛や羊などの家畜から得られる肉やミルクを主食としてきた。その他に主に牛から摂れる血を、割礼を終えた男性や子供を産んだ女性に与える習慣がある。牛の血は豊富なタンパク質を含むため、高齢者が健康のために飲んだり、飲酒後に飲まれたりする。しかし、近年では自らの地域以外で作られたトウモロコシや米、ジャガイモなどを現金で購入し、味付けをして食事をする人々もいる。本来は遊牧民であるマサイ族は強制移住を強いられ、定住化が進む過程で安定した食料を確保するため、耕作を始めるようになった。観光開発や土地開発といった外圧から逃れ、新たな生き方として見出した耕作であったが、これもやがては自然保護区に指定された地域では制限されるようになり、必然的に外部から持ち込まれた商品を現金で買う以外、食料を入手する手段がなくなっているのが現状である。

住居は伝統的な作りの家に住んでいる人がほとんどで家畜の糞と土や枝を組み合わせで作られた家を女性が作り、そこで暮らしている。一夫多妻制を用いている社会で近い身内同士で家を近くに作りその複数の家を囲うようにしてトゲのある草木を置き、自分たちの家畜や家を野生の動物から守っている(図2)。電気や水道、ガスなどのインフラは整っていないため川の水を利用したり乾燥した草を使って火をおこしたりしている。これらの基本的な家事や生活の労働は女性が行い、男性は家畜の世話をすることが主な日々の活動である。



図2 マサイ族の伝統的な作りの家

(筆者撮影 2017)

2. マサイ族の伝統と社会

マサイ族は伝統的な社会構造と文化を保持しており、その1つ1つがマサイ族を「マサイ族らしく」する欠かせない重要な要素である。これらの伝統は上の世代から下の世代へと語り継がれると同時に、長年同じかたちで繰り返し人々によって執り行われてきたことで、世代が変わってもその姿を変えることなく身体に染み付いているのである。

(1)社会構造

歴史的にマサイ社会の全体を統べるような集権的な政治機構は存在していない。バーバラ・グランディンはマサイ社会の空間的な編成を5つのレベルに分けて記述している。もっとも大きな社会的・空間的な集団が民族集団/エスニック・グループとしてのマサイである。それは言語や文化を共有する集団であり共通の年齢体系を備えている。民族集団という分類の次に来るのが20前後の地域集団である。それぞれの地域集団の中で土地や資源の管理・利用が行われ通過儀礼などを統括する単位となっていた

のもこの地域集団である。そうした地域集団の中に複数存在するのが近隣集団である。これは日常的な交流や協力が見られる幾つかの集落が集まって構成されるものであり、牧草や水場などを普段から共同で管理。利用する集団であった。そして集落とは複数の家屋と家畜囲いからなる集住の単位であり、家畜管理を共同で行う基本的な単位であるだけでなく、植物の配分も含めて日常的な相互扶助が様々な形で行われる単位である。マサイ社会において最小の単位とされるのが世帯である。世帯は家畜が所有される基本的な単位で、高い移動性と柔軟性を備えている [目黒 2014:114]。世帯の長は男性の長老が勤め、集落の長をその嫁か母親が務める [Sperling 1987:124]。

マサイ族社会における親族集団は2つの半族と6つの氏族(クラン)がある。マサイ族の言い伝えによると最初のマサイの男性には嫁が2人おり、第1夫人に息子が3人、第2夫人に息子が2人いて、それぞれの子供が氏族の始祖となり、まず5つの氏族が生まれた。そして起源が不明なもう1つの氏族も加わり、現在のマサイ族社会には6つの氏族が存在するに至った [サンカン 1989:10-12; 目黒 2014:115]。さらにそれぞれの氏族は複数の下位氏族へと分かれ、それぞれ固有の焼き印を指定した。焼き印は自分が所有する家畜につけられ他の氏族と区別するために用いられた [サンカン 1989:12-13]。現代においてもこの氏族の仕組みは根強く残っており、所属する氏族または下位氏族を基準に結婚相手を決めている。また、同じ氏族に属する者は家族同様の扱いをお互いにし、その結束力は非常に強い。それはケニアとタンザニアの国境を越えても同じ氏族の仲間として扱う。例えば他の民族やマサイ族間で闘争が起き、助けを必要としている時に、面識がなくとも同じ氏族ということが分かれば仲間として助けに入り、一緒に戦う。家畜を殺されたり奪われたりした時も同じ氏族の人々が集まり、被害にあった仲間のために家畜を分け合い、犯人を捜すのである。氏族は同じ地域に住んでいるわけではなく、それぞれ分散して他の氏族と地域集団を組み生活を行っている。そのため、氏族としての繋がりを持ちつつも、地域集団としての結束もマサイ族が持ち合わせている [目黒 2014:116]。

また、年齢階梯に基づいてマサイ族はあらゆる義務を課されると同時に権利を付与される。女性に年齢階梯はないため、これは主に男性に限った話であるが属する階梯によってコミュニティの一員として果たさなければいけない役目があり、人々は逆らうことなくその慣習に従う。マサイ族社会は男性と長老が敬われる風習があり、それは年齢階梯に基づいた分業と権限の付与に起因する [Spencer 1993:141]。挨拶の際、

幼い子供は目上の人に会うと頭を下げ、手のひら頭を触ってもらうのを待つ。これは最大の敬意を示す役割を持っており、大人の女性であっても権威ある人や目上の人に対しては同じような形で挨拶を行う。

(2)通過儀礼

マサイの男性は通過儀礼を経ていく過程で少年から青年、そして、長老へと年齢階梯としての立場を変化させていく。少年から青年になる過程でマサイの男性は割礼の儀礼を行い青年へととなる。[目黒 2014:119]。それぞれの節目で行われる儀礼の多くが男性を中心としたものである。青年になる時期はそれぞれであるが多くは集落の長老が13歳から18歳の少年を指名し、青年となる儀礼に参加させる。指名された少年たちは全部で2つの入社組を形成し、それぞれタイミングをずらして割礼を行う。やがて2つの入社組は1つの年齢組として社会から認知される[サンカン 1989:48;目黒 2014:116-117]。

男性が最初に行う儀礼はエンキパータ (*Enkipaata*) と呼ばれ、新しい入社組が形成された後に彼らの父親たちによって執り行われる。14歳から16歳ほどの少年たちは新しい年齢組が形成されたことをコミュニティに周知するため、大人の集団に連れられながら4か月ほど自分の村とその周辺地区を歩いて回る。その後、他の地域の入社組との結束を強め、儀礼を行うために建てられた村落に集まる。儀礼当日は軽い服装を身にまとい一日中止まることなく伝統的な踊りを行う。この一連の流れこそがエンキパータであり、これを終えた少年たちはマサイ族にとって最も重要である割礼の儀礼を受ける準備が整う。

割礼を終えた少年は自らの土地を守る責任感を追うようになり、戦士として誇り高い存在になれる。そのため、多くの女性が割礼の儀礼から離れる一方、割礼の先にある地位、名声、権威がマサイ族社会の中で高く評価されているため、男性の割礼は未だに行われている。また、ス펜サーはこの青年の時期を男らしさが最高潮を迎える時期であり、多くの少年が待ち望む儀礼が割礼の儀礼であると指摘し、マサイ族コミュニティでいかに青年が憧れの存在として扱われているかがわかる[Spencer 2004:68]。割礼は痛み止めや特別な器具を用いて行われなため、激しい痛みを伴うものであるが、青年へととなる者は儀礼の間、一切泣いたり、痛みをこらえるために大声を出したりしてはいけない。一人前の戦士となる者が弱音を吐いた場合、本人とその家族は周

囲から冷やかに合い、コミュニティ内での権限を実質失うことを意味するため、全員が痛みを我慢し、儀礼を乗り越える。

割礼を終えた少年は、自然治癒で完治するまで3ヶ月から4ヶ月かかり、儀礼の後8ヶ月ほどは顔の一部を白色の塗料で塗り、マサイ族が一般的にまとう赤色とは異なる黒色のシュカを着用する(図3)。これは少年が割礼の儀礼を乗り越え、立派な青年になろうとしていることを周囲に示す役割を担い、いかなる理由があろうともこの少年に対して罵声を浴びさせたり、危害を加えたりすることはタブーとされている。万が一、少年が何らかの被害を受けた場合は、それを行った者が地域全体に償いを行わなければならないという古くからの慣習が存在する。治癒が終わるタイミングで少年は青年へと「生まれ変わる」。

女性も割礼がおこなわれるがその多くが男性との結婚が正式に決まった際に執り行われる。女性の割礼には男性の場合とは異なり、年齢階梯としての変化はなく、男性に忠誠心を誓うための象徴として位置付けられている。女性割礼はジェンダーの観点からも国際的な問題として取り上げられ、SDGs⁽⁸⁾の中にも女子割礼を有害な慣行として撤廃すべきであるとして取り上げられた。しかし、いまだに農村部では政府の目が行き届かないところで女子割礼が日常的に行われている地域もある。

青年へとなる割礼の儀礼の後男性が次に儀礼を行うのは、10年後の上位青年へとなる儀礼である。この儀礼はユーノート(*Eunoto*)と呼ばれ、この儀礼を行うことで上位青年へとなった男性は女性と結婚する権利を与えられる。マサイ族の女性の多くが10代で親や他の大人によって決められて結婚をする。そのため、大半の場合10代の若い女性がユーノートを経た20代の男性と結婚するのである。ユーノートの儀礼の後行われるのがオルンゲシャ(*Orngesherr*)の儀礼であり青年の間伸ばしていた髪の毛を嫁に切ってもらい、年齢階梯の最終段階である長老へとなる。

その他にもミルクを飲む儀礼や肉を食べる儀礼などあるが、特記すべきはいかにマサイ族がそれぞれの儀礼を大切にし、現代へと受け継いできたかということだ。グローバル化とともに、マサイ族の文化や慣習が世界中で認知されるようになり国際社会からあらゆる慣行に対して非難を受けながらも、彼らがかたちを変えることなく、存続させる理由が、細部までこだわり特別な意味合いを持つ1つ1つの儀礼から見出せる。

(3)ウシの民

先に述べたようにマサイ族は「ウシの民」としてのアイデンティティを保持し、『世界民族辞典』（2000）の中では「牛に高い文化的・社会的価値多く牧畜民であり、伝統的に生業活動として狩猟・採集や農耕は行わない」と説明されている[河合 2000:635]。ウシの他にヤギや羊、鶏を飼養し、荷役としてロバを飼うこともしている。その中でもウシはマサイ族にとって肉やミルク、血などの食料を提供してくれる家畜のみにとどまらず社会的・文化的に意味のあるものとして扱われてきた。家畜の皮は衣装、履物、ベッドの敷物、ロープに加工されて使われ、牛糞は土と混ぜて家屋の壁を塗るのに用いられる[湖中 2006:43]。ウシは男性の財力や力を表す際に用いられ、所有している牛の数によっては結婚が認められないという例もある[目黒 2014:123]。また、信仰の対象に捧げるためや通過儀礼など大切な儀礼の際に供犠として用いられるほど、ウシは高い価値を見出されている。

(4)宗教

マサイ族社会にはヌガイ（*Ngai*）またはエンカイ（*Enkai*）と称される神を信仰する一神教が古くから存在している。この神はタンザニア北部に位置する標高 2000 メートルを超える火山、オールドイニョ・レンガイ（*Ol Doi Nyio Lengai*）の山頂に座するとい伝えられている。マサイ族が初めてウシを手にしたのはこの神から授けられた時であるの言い伝えがあり、そのため人々は家畜の中でも特にウシを大切に扱い、結婚式や通過儀礼などの重大な行事の時に料理として差し出す。神が天と地を創造したと伝えられているため、乾季が長引き、作物や家畜、人々の生活そのものに影響が出始めるとウシやヤギを神の元へと連れて行き雨乞いの儀礼を行う。雨はマサイ族にとって非常に大きな役割を担っている。乾季になり水が不足すると、家畜が食料とする草が枯れ始め、しまいには無くなってしまう。また、人々が選択をしたり、体を洗ったりする際にも雨水は使用され、生活のあらゆる場面で使用される川も雨がなければ次第に枯れてしまう。まだ携帯電話やインターネットが普及していない頃、自然が生み出す雨がいつ来るのかが正確にわからない彼らにとって、拠り所となっていたものこそが、神が宿る火山である。

3. 現代のマサイ族

ここまで述べてきたマサイ族の暮らしから明らかなように、彼らは伝統的な暮らしを昔から変わらずに営んできた。それは、自分たちの文化に対する誇りと憧れの両方によって保たれ、そのかたちを変えることなく伝承されてきた。しかし、近年のマサイ族社会においては、これまでと同様に伝統的な文化活動を送ることが困難になってきた。

今まで若者の「憧れ」の対象は自分より先に「青年」や「長老」となった年上の存在であったが、携帯電話とインターネットの普及により海外のスポーツ選手や有名人の情報をリアルタイムで得ることで、よりその存在が身近になり、新たな「憧れ」の的として人々が意識し始めたのである。その影響もあり服装も西洋的な服を着る人が増え、シュカを一切着ない人も現れた。宗教においてもドイツやイギリスによる植民地化政策以降の入植者の増加、並びに西洋文化の流入により、キリスト教やイスラム教が広まりを見せ、伝統宗教のみを信仰する人は少なくなっていった。他の宗教を信仰する人々が増える過程で、伝統宗教は人々の唯一の拠り所という意味合いから、マサイ族文化の「象徴」的存在へと姿を変えた。現在では、生まれ育った地域を離れ、街に出稼ぎに行くマサイ族も少なくなく、ケニア首都のナイロビなどの大都市に暮らす人もいる〔池谷 2006:139〕。



図3 割礼の儀礼を終えて青年になる前の少年

(筆者撮影 2017)

第4章 エンデュレンにおけるキリスト教と近代化

1. 調査対象地の概要

タンザニア主要都市のひとつであるアルーシャ州の国際空港から北西に約 260km、車で 6 時間ほど向かった先にンゴロンゴロ県エンデュレン区は位置する。ンゴロンゴロ県は 1959 年に保全地域に、1979 年には世界遺産に指定され、隣接するセレンゲティ国立公園と共に世界中の観光客が訪れる観光地である[上田 2011]。エンデュレンは標高約 1,800m、1,753km の面積に 1 万 3,537 人が住むンゴロンゴロ県の中で 2 番目に規模が大きい地区であるが⁽⁹⁾、観光名所であるンゴロンゴロ・クレーターからも車で約 2 時間かかる場所に位置するため観光客が訪れることは滅多にない。気候は 10 月から 4 月が雨季で 5 月から 9 月が乾季となるサバンナ気候である。そのため人々は時期に合わせて家畜の飼育方法を変え、飢餓や病気から身を守るための工夫をしている。

この地域には小売店が多く存在し、月に 2 回都市部から大型のトラックが村に訪れ多くの物資を運び入れている。またそれに合わせて、村の中心部から 3 km ほど離れた場所でマーケットも開催され周辺地域の住民もこのマーケットのために何時間もかけて訪れる。明け方から日が落ちるまで開催され、日用品からアクセサリー、雑誌なども売買されている。現金とモノのやり取りが主流ではあるが、家畜を売ってそれ相応のモノを得る対価交換も行われている（図 4）。



図4 エンデュレンのマーケットの様子

(筆者撮影 2017)

前述したとおりエンデュレン区全体が自然保護地域内にあり、道路や送電設備の建設を行うことが非常に困難な環境であるため、基礎的なインフラが整っていない。また、野生動物と人が暮らす区域に境界線はなく、夜になるとライオンやハイエナなど人間を襲う恐れのある動物も活発に活動するため、外部から来た人は22時に、現地の人に対しても23時までには自分の家に入り外出を控えるように勧告されている。基礎的な交通インフラが整っていない一方で、携帯電話の普及率は非常に高く、幅広い世代の住民が携帯電話を使用している。2012年にはタンザニア政府によってエンデュレン近くに電波塔が設置され、デジタルインフラが広まりを見せた。携帯電話の充電や、その他設備に必要な電力は都市部から仕入れたソーラーパネルより供給されるものを使用している。ソーラーパネルを用意できない利用者は、大型のソーラーパネルを所有している家庭に電力を貸してもらい携帯の充電などを行う。裕福な世帯は、平均で1回1,000 シリング(TZS)⁽¹⁰⁾で自分の電力を他人に貸し、他の住民から現金収入を得ている。

エンデュレンには初等教育機関が3校と中等教育機関が1校存在する。3つある初等教育機関のうち2校はキリスト教会が運営しており、残りの1校のみ公立学校である。キリスト教教会が運営している学校は後述する通り、設立してから間もなく独自の教育方針を持っているため、公立学校と比べて生徒数は少ない。1947年に設立された公立学校の Endulen Primary School は周辺地域の公立学校に比べて生徒の数が非常

に多く、1人1人に対する教育の質の低下が懸念されている。以下、エンデュレンカトリック教会が2017年3月に行った初等教育機関に関する調査と筆者が現地の方にインタビューした内容をもとに、エンデュレンとその周辺地域における初等教育機関の現状をまとめる¹¹（表3）。

表3 エンデュレン及び周辺地域における公立小学校の現状

地区名	教室数	教員数	生徒数	クラス毎の生徒数	平均 PTR ⁽¹²⁾ (人)
エンデュレン (Endulen)	10	15	1,063	89-218	106
ミシギヨ (Misigiyo)	9	10	571	48-108	63
エセレ (Esere)	7	10	475	43-110	68
ンディアン (Ndian)	7	10	485	34-106	69
モキラル (Mokilal)	9	12	839	62-128	93

（出所：カトリック教会が2017年3月に行った調査をもとに筆者作成）

表3で示した通り、エンデュレンは他の地域に比べて生徒数が1,063人と1番多いにもかかわらず、それに見合う教師の数が確保されていないため、教師1人当たりが受け持つ生徒の数も必然的に多くなっている。OECD⁽¹³⁾加盟諸国におけるPTRの平均は21人で、エンデュレンに限らず周辺地域においても教師の数が生徒数に見合っていないことが明らかである⁽¹⁴⁾。また、生徒の欠席率はそれぞれの学校において10%程度と高く、その要因は様々であるがマサイ族がほとんどを占めるエンデュレンにおいては、学校教育に必要性を感じていないという文化的理由が1番であった。そしてエンデュレンの学校のみ、遠方から通学している生徒のために学生寮を用意しており、

それがオックの生徒を抱える要因ともなっている。エンデュレンとその周辺地域を含めた5つの学校はすべて公立学校であるが、どの学校も、生徒の分散と教師の増加を図り、地域全体として教育の質を改善するために新たに私立学校を設立することに賛成している。

2. 調査方法及び調査対象者

2017年9月8日から同年9月28日の約3週間にわたって調査対象地であるエンデュレン地区に滞在し、住民に対してインタビュー⁽¹⁵⁾を行った。インタビューの手法は対話形式を取り、特定の質問にとらわれず1人当たり1時間程度の会話を進めていった。その中で本研究のキーワードでもある「近代化、キリスト教、文化、教育」に関する発言に着目しエンデュレン地区における「近代化」を明らかにしていく。一部の英語話者を除いて、インタビューは協力者である Mepu の通訳のもと行われた。Mepu はエンデュレン地区出身のボランティア団体现地職員として常日頃から英語を使用しているため通訳者として依頼した。また、長年エンデュレン地区に住んでおり住民との距離も近いとため、より具体的なインタビューを行えた。

調査対象者は性別、学歴、年齢など特別なフィルターをかけず、研究の主旨を説明した上で同意してくれた住民すべてを対象とした。その中で論文への記載を許可していただいた住民のリストを以下の（表4）で示す。

表4 インタビュー対象者一覧

	名前	性別	年齢	最終学歴	職業
1	Mepu	男	25	大学卒	ボランティア団体现地職員
2	Kimani	男	31	大学卒	NGO 団体創始者・ツアー会社職員
3	John	男	24	大学卒	無し（教員免許保持）
4	Bahati	男	30	大学卒	プロテスタント系孤児院教師
5	Sadera	女	38	大学卒	プロテスタント系孤児院教師

6	Eric	男	28	高校卒	プロテスタント系孤児院教師
7	Agustino	男	43	大学卒	元村長、Traditional Leader
8	Lethesta	男	27	大学卒	村長息子 政治家
9	Nema	女	47	中学卒	無し
10	Miriam	女	43	中学卒	無し
11	Yunis	女	50	高校卒	無し
12	Sam	男	34	大学卒	公立小学校教師
13	James	男	26	初等教育のみ	ホステル料理人
14	Father Albano	男	36	外部出身	カトリック教会教父（5年目）
15	Elikana	男	38	大学卒	元 NCAA ⁽¹⁶⁾ 職員
16	Tom	男	26	中学卒	無し

（筆者の現地調査に基づき作

成）

調査対象者の概要を表4に記載されている順番で以下に示す。

① Mepu

エンデュレン出身のカトリック系キリスト教徒。マー語、スワヒリ語、英語話者で本研究のインタビュー翻訳や人の紹介など尽力してくれた。教会の援助を受けながら学校に通い、都市部の大学を卒業したのち、自らの文化、コミュニティを守りたいという想いのもとエンデュレン地区に戻る。現在はイギリスに本社を持つボランティア斡旋団体の現地職員として5年間働いている。

② Kimani

エンデュレン出身のカトリック系キリスト教徒。マー語、スワヒリ語、英語話者。大学で観光業を学び、タンザニア国内のツアー会社に勤めながら、2009年にマサイ族の女性に焦点を当てた NGO 団体を設立。主に女性の教育支援を推進している。大学を出て学んだ知識や経験を今度は自分の村に還元したいと語る。そ

して、マサイ族の文化に誇りを持ちつつ、教育の重要性についても強調していた。

③ John

エンデュレン出身のカトリック系キリスト教徒。マー語、スワヒリ語、英語話者で教員免許を保持している。Mepu と同じく協会の援助を受けながら大学まで通い、教員免許を取得したが、エンデュレン地区には教員採用の枠が現在は無く、職がない状態。彼もエンデュレンに住みながら働きたいという想いが強く、仕事が見つかるまでは家の手伝いをしながら暮らすと語る。

④ Bahati

ンゴロンゴロ県外出身者。プロテスタント系キリスト教徒で、私立学校の教師として 2015 年から勤めている。スワヒリ語と英語のみ話せてマー語は挨拶程度しか話せない。ケニアとタンザニアの国境付近で警備の仕事をしていたが、友人の紹介でエンデュレンの学校に来る。自分の給料よりも大切なものがあると語り、教育経験はないが子供達の将来のために教師として働いている。

⑤ Sadera

ンゴロンゴロ県内出身者のプロテスタント系キリスト教徒。英語とスワヒリ語話者でマー語は話せない。私立学校の教師として 3 年間働いている。もともと別の場所で教師として働いていた。教育に対する思いが強く、エンデュレンの子供達にとって一番大切なものは伝統文化よりも教育であると語る。

⑥ Eric

ンゴロンゴロ県内出身のプロテスタント系キリスト教徒。マサイ族で英語とスワヒリ語とマー語話者で、私立学校に勤務する。マサイの伝統文化に触れながら育ってきたが、その古典的な考えを教育を通して子供から遠ざけたいと語る。マサイの慣習をよく思っていない。

⑦ Agustino

エンデュレン出身で、英語とマー語を話せる。カトリック系キリスト教徒ではあるが毎週の礼拝には参加していない。10 年間村長(*Chairman of Community*)を務めたのち、5 年間区のカウンセラー (*Counselor of Ward*) として行政の立場から村に関わってきた。現在は文化保全の役割 (*Traditional Leader*) を担う立場でマサイの文化や慣習を守る活動を広げている。

⑧ Lethesta

エンデュレン出身で政治活動をしている。⑦Agustino の長男でカトリック系キリスト教徒。県外の大学を出ており英語とスワヒリ語とマー語を話せる。マサイの文化が変わっていく要因はたくさんあげられるが一番は宗教であると語る。マサイ族として自らの文化を守りたいとも語っている。

⑨ Nema

エンデュレン出身の女性。マー語のみ話せる。伝統宗教を信じ、教会にも通っていない。2人の娘を持ち学校に通わせたいと語る。日常的には装飾品を作ることが生業としている。

⑩ Mirium

エンデュレン出身の女性。マー語のみ話せる。キリスト教徒ではあるが教会には通っていない。中等教育までの教育を受けたが、その後すぐに結婚をし、家事や子供の世話をしながら生活をしている。子供にはよりたくさん教育を受けさせたいと語る。

⑪ Yunis

エンデュレン出身で Agustino 氏の嫁。カトリック系キリスト教徒で毎週日曜日は礼拝のため、教会に訪れている。マー語のみ話せる。娘は大学に通っており、教育の重要性を語っていた。

⑫ Sam

アルーシャ⁽¹⁷⁾出身の公立学校教師。英語とスワヒリ語を話せる。カトリック系キリスト教徒で 2012 年からエンデュレンの公立小学校で教師として勤めている。長年、外部の人間としてエンデュレンに住み、コミュニティの文化に対する変化を毎年感じ続けていると語る。

⑬ James

エンデュレン以外の村出身でマー語と英語とスワヒリ語話者。初等教育を終了した後、家事を手伝うため学校に通わず、現在は教会の料理人として雇われている。もう一度学校に行って新しい世界を見たいと語る。

⑭ Father Albano

2014 年 7 月からエンデュレンのカトリック教会で神父を勤めている。マサイの文化や慣習について寛容的でコミュニティと一緒にあって新しいマサイの形を見つけないかと語る。英語とスワヒリ語しか話せないが、現在マー語も勉強中。

⑮ Elikana

エンデュレン出身のカトリック系キリスト教徒。英語、スワヒリ語、マー語話者。
元 NCAA 職員として海外の大学で講演をしたり、外部からの訪問者を受け入れて
いたりした。現在は個人でツアーガイドをしておりエンフレンに拠点を置いてい
る。

⑯ Tom

エンデュレン出身のカトリック系キリスト教徒。英語、スワヒリ語、マー語を話し、
小売業を主に行っている。マサイの文化はより西洋的になっていると語り、伝統あ
る文化を守りたいと語る。

3. エンデュレンにおける近代化

インタビュー調査は、特定の質問項目を設けない対話形式で進めたが、その中でも
「伝統文化の変化、近代」に関する部分については、対話の中で触れられなかった場
合のみ直接質問をして回答を得た。「マサイ族文化に変化をもたらしている要因は何
か」という項目については（図 5）のような結果が得られた。なお、調査対象者数と
図の中で示されている人数の合計が一致しないのは、複数得られた回答も 1 つずつカ
ウントしているためである。

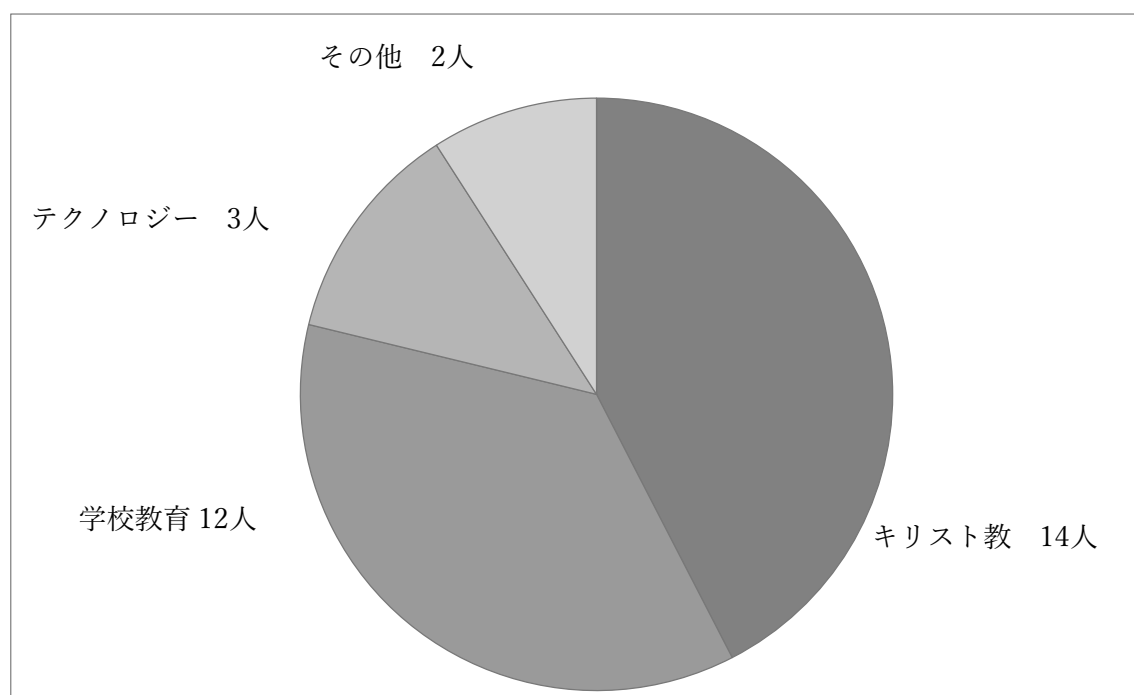


図5 「マサイ族文化に変化をもたらしているものは何か」回答

(出所：筆者の調査に基づき筆者作成)

インタビューの結果、エンデュレンにおいてマサイ族文化に変化をもたらしているものの中で、大きな要因となっているのは「キリスト教」と「学校教育」であることが明らかになった。なお、「学校教育」は公立学校の活動と、後述するキリスト教の教会が運営する学校の両方が含まれているため、いかに教会の影響が広がっているかが伺える。それぞれがコミュニティに与える影響やそれに対する住民の反応については後述する。

「テクノロジー」と答えた人は3人であった。ここには携帯電話の普及や医療技術の発展も含まれ、とりわけ病院における新しい技術の導入がコミュニティに大きなインパクトを与えている。エンデュレンにはカトリック教会によって1976年に設立された病院が1つ存在する。そこには外部からの医者と看護師が常駐しており、精密な検査と症状に合わせた薬を提供され、万が一病気にかかっても適切な治療を受けることができる。一方、マサイ族社会にも伝来の薬が存在する。香草、樹皮、根などを煎じたものが、胃の調子や血液の状態を良くするために、病気のときなどに使用される。またその他にも喉の疾患や腹痛、骨の痛み、妊娠不調、関節痛などにも効く薬であるとされ、このような知識は日々の生活の中で受け継がれてきた[サンカン 1989:103]。近代的な医療と伝統医療が混在する中、人々はより効き目があり正確な、新しい医療に頼るようになった。その結果、治療費としてこれまで以上に現金や家畜が必要となっていたのである。

「その他」には貨幣経済システムの流入と政府による規制が挙げられた。日常的に外部で作られたものを現金で購入するようになったマサイ族にとって、現金はもはや生活の一部となっている。エンデュレンで月に2度開催されるマーケットで自分の家畜を他の家畜や商品と交換する人もいるが、その数は多くない。また、個人が所有する家畜の数の減少も理由に挙げられる。現金を中心に経済が発達することで、伝統的に行われてきた等価交換の文化は衰退している。「政府の規制」の中であげられたのが土地利用の制限である。エンデュレンは国立公園と隣接し、地区全体が自然保護国指定されており、自由に土地を耕して種を植えたりすることを禁じられている。そのため、食料確保のために外部のものを購入せざるをえない。また、家や新しい小屋など

何か建築物を作る際も逐一報告をし、許可を得なければ建設してはいけない。生活の様々な側面を政府に規制されて生活している彼らは、あらゆる自由を政府によって奪われている。

2つの概要から述べ、それぞれの教会の考察を踏まえた上で近代化とキリスト教についてのインタビュー調査の内容をまとめる。

4. エンデュレンにおけるキリスト教の役割

マサイ族は一神教の伝統宗教を信仰してきたが、植民地化や国家の独立とともにキリスト教徒やイスラム教徒の数が増加した。エンデュレンにおいても、キリスト教の広まりは顕著に表れており、村の中心部にキリスト系の教会が3つ存在している。これらの教会や、その神父、牧師の家などは(図6)で示すようにすべてコンクリート、レンガ、ペンキを使用した西洋的な建物であり、その大きさと近代的な様相から村の中では一際目立つ建築物となっている。



図6 エンデュレンカトリック教会の外観

(出所：筆者撮影 2017)

エンデュレン地区に存在する3つのキリスト教会はそれぞれカトリック教会とプロテスタント系のルーテル派、ペンテコステ派である。その中でもカトリック教会とペンテコステ派の教会は、その活動の規模感や信者の人数からエンデュレンにおいて大きな影響力を持っている。教会は週に一度の礼拝だけではなく、学校教育やその他の地域貢献活動も行なっている。以下にそれぞれの教会がエンデュレンで最も力を注いでいる学校教育の活動を中心にエンデュレンにおける役割やその他の活動を示す。ここであらかじめ明記しておきたいのが、本章で論じられている宗派ごとの取り組みや見解、住民の意見というのはあくまでも筆者がエンデュレン地区で行ったフィールドワークに基づくものであり、特定の宗教を支持、批判することを目的としていない。

(1)Endulen Catholic Mission

カトリック系キリスト教の教会で1970年代に設立され、エンデュレンにおいて最大の信者を抱える。神父は4年から5年の周期で入れ替わり、神父に地区や教会を選ぶ権限は与えられていない。現在の神父であるFather Albanoによると、教会を訪れる人数は年々増え続けており、地区全体の8割に当たる住民がカトリック系キリスト教徒で、残りはキリスト教の他の宗派か伝統宗教に属する。Endulen Catholic Missionは毎週日曜日に礼拝を2度行う。これは外部出身で公立学校の教師としてエンデュレンに滞在しているスワヒリ語話者や、マサイ族の中でもスワヒリ語が流暢な若者向けの礼拝と、長年エンデュレンに住んでおり、マー語のみを話せるマサイ族を対象とした礼拝と、対象を分けているのである。

表5 Endulen Catholic Mission の礼拝時間及び使用言語

時間	礼拝の際に用いられる言語
08:00-10:00	スワヒリ語
11:00-13:00	マー語

(出所：カトリック教会神父へのインタビュー調査に基づき筆者作成)

教会としての通常の活動以外では、以前より村の中心部から離れて暮らす家庭の子供を教会が運営するドミトリーに受け入れ、就学までの支援を行ってきた。地区に唯

一存在する公立学校は遠方からの生徒も受け入れ、寮も保持しているため、教会のドミトリーで過ごしてきた子供は就学後、学校のもとで生活をするようになる。しかし、本章の第1節で述べたように公立学校の生徒数は年々増え続け、エンデュレンでは新たな学校建設や教員増加が課題となっていた。そこで **Endulen Catholic Mission** は公立学校の教師や村長などとの話し合いを経たのち、2017年5月に初等学校運営を始め、2018年1月現在までに38名の生徒を抱えている。38名の生徒のうち12名は難聴もしくは耳が聞こえづらい症状を患う生徒で、教会は手話でコミュニケーションを図れる講師を外部から招き、その他の生徒に対してはスワヒリ語で授業を行っている。教会は今後の計画として学校設備の向上、それに伴う生徒の受け入れ数拡大、さらには地区の中心部に中等教育機関を設立することを掲げている。

また、2013年には外部の開発団体と協力してエンデュレンに安定した水を供給できる設備を整えるプロジェクトを成功させた。これまで住民が利用出来る水は村の近くに走っている一本の川から得られるもののみで、主に女性や子供が1日に何時間もかけて水を汲み、家まで運ぶという作業を繰り返してきた。しかし、このプロジェクトの成功により、村の中心部に巨大なタンクが設置され、女性や子供の負担が軽減された。家事や勉学に励む時間が確保されただけでなく、浄水を供給されることにより衛生面でも大きな改善がなされた。このように、様々な活動を通してエンデュレンの住民と社会に密接に関わってきた教会は、近年、マサイ族の伝統的な慣習にも触れるようになった。

第3章2節5項で述べたようにマサイ族社会は一夫多妻制で、婚姻相手も早期に母親や女性本人の意思を反映せずに、父親や地域の年配の人によって決められる見合い結婚 (*Arranged Marriage*) がほとんどのため、多くの女性が一方的に自由を制限されている状態にある。結婚を望まなかったり、より自由に生きたいという意思のもと教会に逃げ込む女性も多く、そのような場合に神父は直接結婚を取りまとめた父親や年配の男性に話をして女性に自由を与えるように説得し、話が解決するまで女性を安全な場所で保護している。他にも地区の女性を対象とした座談会を開催し、それぞれが抱える家庭や社会での女性特有の悩みを共有することで、女性の地位向上や男女平等社会の実現を目指している。**Father Albano** はこのような伝統文化に触れる活動について、周囲の住民から悪い評判を得たことはないとし、その背景にはそれぞれの問題を「教会と男性」や「女性と男性」など大きな対立構造を生まずに個々に説得し、解決

していることがあると指摘した。

(2)Free Pentecost Church Tanzania

プロテスタント系ペンテコスタ派キリスト教のこの教会は 1993 年に現在の牧師である Pastor John によって設立された。マサイ族である牧師は、より多くの女性や子供たちが教育を受け、社会に進出していけるよう活動を広げている。礼拝は毎週日曜日の朝 7 時 30 分から 1 度行われ、スワヒリ語とマー語の両方の言語を用いて執り行われる。

2011 年から教会はマサイ族の孤児を受け入れる孤児院（Ebeneza Maasai Children Center）を運営している。エンデュレンやその周辺の地域において、医療機関の設備は乏しく高度な医療を受けられないが為に妊産婦の死亡率は非常に高い。また、近代的な医療技術に頼らず、伝来の薬草や飲み物を服用し、感染症などで死亡ケースも少なくない。このような背景から親を持たない、もしくは片方の親しかいない子供が多く発生し、こうした自力で子供を育てられない家庭や、生活する場所がない子供を対象に孤児院は開かれた。

子供たちが孤児院を出た後も自立して生活し、社会の一員になれるようにとペンテコステ教会も学校運営を行っている。教会が運営している学校には筆者が 2015 年 8 月に訪れた際は 3 クラスで構成され、児童数は 36 名だったが、2017 年 9 月の時点では 6 クラスに増え、児童の数は 142 名となっていた。幼児教育から初等教育の第 4 学年まで受け持つこの学校は牧師の他に 5 人の先生と 3 人のスタッフで運営され、学校での授業以外に孤児院の運営や食事の管理なども業務の一環として行われている。孤児院と学校が併設されているため、児童を洗濯のために近くの川へ連れて行ったり、ドミトリーの清掃や新たな児童の受け入れを行ったりとスタッフは休むことなく働いている。

この学校で使用される主な言語は英語で、全学年「スワヒリ語」の授業以外は英語で行われる。授業以外の場面においても児童と先生が会話をする際は英語で話し、日常的に英語を使用している。この背景には、これからの社会で子どもたちがより多くの人とコミュニケーションをとり、社会進出していくためには英語能力が最も重要であるという、先生や学校を運営している牧師の意向が含まれている。そのため、孤児院の学校に通う生徒の英語力は、地区の中に存在する公立学校に通う児童に比べて極

めて高い。また、児童らは学校に通うようになるとイングリッシュネームを与えられ、お互いをその名前で呼び合う。

ペンテコスタ教会が運営する孤児院や学校に通う子供の数が年々増えているのには、2つの要因がある。1つ目は他の孤児院が周辺地域に存在しないこと、そして2つ目がこの学校が周辺地域で唯一の英語で授業を行う学校 (*English Medium School*) であるということである。前述した通り 2011 年から始まった孤児院に預けられる子どもの数は年々増え続けている。その背景には孤児院の存在がより多くの人に認知し始められたほかに、同様の施設が周辺地域に存在していないことが挙げられる。マサイ族の子供を対象とした孤児院はンゴロンゴロ県内にこのペンテコスタ教会が運営する 1 つしかなく、エンデュレンから遠く離れた地域からも孤児は集まる。実際に筆者が 2017 年 9 月に滞在していた期間にも新たに 4 人の子供が運ばれてきた。運ばれてくる子供の多くが未就学児で、自らが置かれている状況も分かっていないような者ばかりであった。エンデュレンに遠方から孤児が運ばれてくる理由として、同地域が月に 2 度マーケットを開き、遠方からたくさんの人を呼び寄せていることも少なからず関係しているであろう。

2 つ目の要因である英語教育は、村の中で大きな注目を浴びている。英語を用いた学校教育は児童の英語能力向上に大きく貢献し、児童の社会的自立⁽¹⁸⁾を促すのに一定の効果をみせている。当初は孤児院の子供たちに教育の機会を与えることを目的として始められた学校運営であるが、最近ではその英語教育の充実性や成果が評価され、一般的な家庭に暮らす子供をエンデュレンの公立学校からペンテコスタ協会が運営する学校へ転校させるというケースも見受けられる。しかし、途中から編入してきた生徒は他の生徒と比べ英語力が乏しく、授業内容もまともに理解できていないという事態が生じている。年齢や他の科目の成績を考慮すると初等教育第 4 学年レベルに相当する生徒であっても語学の面だけみると第 2 学年レベルの生徒も存在しているが、特別に英語の授業を行うには人員も時間も制限されているため、生徒の適切な学年分けというのが課題としてあげられている。

孤児院を発足した当初に比べ、外部からこの学校に訪れる子供の数は増え、在学している 142 人のうち孤児院で暮らす生徒は 2017 年 9 月の時点で 108 名である。そのほかに、孤児院から 10 キロメートル程離れた場所に位置する中等教育機関に通う子供も 13 名いる。ペンテコスタ教会は 2018 年の春に政府から正式に「学校」としての

認定を受けることを目標として掲げており、そのために認定の一つの基準でもある教室やその他設備の拡充を現在行っている。現在は住民や外部からの寄付金で学校及び孤児院の運営を賄っているが、政府からの認可が下りることによって一定額の資金を支給され、さらには中等教育レベルまで指導を行うことが可能となり、現在遠方まで通学している孤児院の子供達を自らの学校内で面倒を見ることが可能となる。

5. エンデュレンにおけるカトリック教会とペンテコスタ教会に関する考察

カトリック教会とペンテコスタ教会の2つのキリスト教宗派は前項で述べた通り、エンデュレンにおいて少なからず影響力を持っている。教会としての活動はもちろんのこと、地域におけるその他の活動においても同じような働きかけが見受けられた。住民にとってマサイ族文化が変化する一番の要因であると感じられたキリスト教であるが、影響力の大きい2つの宗派は住民にどのように受け止められているのか、また、カトリック教会がいかにしてペンテコスタ教会より多くの信者を抱えるに至ったのか。本節では以上の2つの議論を中心にフィールドワークとインタビュー調査を通して得られた「語り」をもとに宗派ごとの受け入れられ方や相違点について考察を行う。

(1) マサイ族文化に対する寛容度

カトリック教会とペンテコスタ教会で最も大きな差異が生まれたのはマサイ族の伝統文化に対する寛容度である。伝来の慣習や風習が根強く残っている社会に外部の宗教が幅広く受け入れられ、社会の一部となるためには相互の文化や価値観に対する理解と歩み寄りが欠かせない。両教会とも毎週日曜日に行う礼拝をスワヒリ語とマー語の2つの言語を用いて、言語の面で特定の集団を排除しない要素を持っているが、礼拝に訪れる際、着用できる衣服やアクセサリーの制限で差異が見受けられた。マサイ族は伝統的な服装の他に耳に大きく穴を開け、ピアスのようなアクセサリーを身につけるのだが、ペンテコスタ教会はそれら装飾品の一切の着用を認めていない。該当する装飾品を身につけて教会に訪れた人はその場で外すように指示され、厳重な注意を受ける。一方で、カトリック教会はマサイ族の伝統的な服装や装飾品の着用の制限は一切行わず、寛容的であった。マサイの文化とキリスト教の対立についてペンテコスタ教徒で同教会が運営している学校の教師でもある Sadera は「あのような（耳に大きく穴を開けて取り付ける）装飾品は子供にとって悪影響で、見せるべきではない。子

供たちを正しい道に導くためには大人がしっかりとしなければいけない。（マサイ族の）文化を否定しているわけでないが、間違っていることは正さなければいけない」（カッコ内は筆者補足）と語る。一方で、カトリック教会神父の **Father Albano** は「彼ら（マサイ族）の文化を受け入れなければいけない。我々（外部から来て住んでいる者）はコミュニティとの信頼があつてこそ成り立っている。ただ、キリスト教の教えを説く者としてその教えや人道的価値観に反する慣習や風習に関してはしっかりと意見を言わなければいけない。（中略）（言われた意見の）受け止め方は人それぞれだ。それを行うかどうかまで私たちは関与することはできない。それは（マサイ族のコミュニティに限らず）どこコミュニティにおいても同じことだ」（カッコ内は筆者補足）とし、2つの宗派ともキリストの教えに反することに対しての姿勢は同一であったものの、強制力という点では意見が異なっていた。キリスト教がエンデュレン、ないしマサイ族コミュニティの中で広まる過程でそれぞれの教会が、どのように地域と関わってきたかが伺える。

インタビュー調査の中で「マサイ族としての誇り」や「伝統文化に対する愛着」をキーワードに話を伺うと、ほとんどの人が自らの文化を大切に、保全していきたいと述べた。例えば **Yunis** や **Lethesta** は、「マサイの文化に高い誇りを持っている。それは、今では他の民族までも私たち（マサイ族）の伝統的な衣装を評価して、それを着用して生活をしている（**Yunis**）」、「マサイとしての文化は捨てるべきじゃない。

（中略）（自分が身につけているシュカを指しながら）この服装だって俺たちの伝統文化の一つだ（**Lethesta**）」と述べた。彼らにとって「マサイ族らしさ」または「マサイ族の文化」として挙げられるもののなかで服装や装飾品は非常に大きな役割を果たしており、それがマサイ族としてのアイデンティティの一種となっている。筆者がフィールドワークを終えて、最後に記念写真を撮ることになった時も女性は家から首飾りやピアスを持ってきて着用し、シュカを身につけていなかった男性は1枚だけでも羽織って写真に映ろうとしていた。このような行動からもマサイ族の人々が自分たちの象徴を身につけているアクセサリーや服にも見出していることがわかる。

このような、マサイ族の彼らにとって文化の一部である装飾品の着用を教会から制限されることは、文化そのものを否定され、強制的に変えさせられていると感じる人も少なくないだろう。**Mepu** は「母親がもともとペンテコスタ派だったが、装飾品の着用を禁止されて、カトリックに変えた。」と語り、自らが信仰する宗教さえも変えて

しまうほど、自らの文化に対する思いは強い。以上のことから、マサイ族文化に対する寛容度の違いという点でエンデュレンにおいてカトリック教会が他の宗派に比べて支持を得ていることがわかる。

(2)学校教育に関する見解

次に教会が運営する学校に関する分析および考察を行う。「学校教育がマサイ族の伝統文化を変える（Tom）」、「（マサイ族の文化を維持する立場からみると）1番恐れているのは教育の力だ（Agustino）」(カッコ内は筆者補足)と学校教育が文化に与える影響を危惧している人もいる。そうした中で、ペンテコスタ教会の職員であるBahatiとEricは以下のように語った。（以下カッコ内は筆者補足）。

Bahati 「マサイ族の子供たちにとって教育が何よりも大切だ。初等教育と中等教育の最低限の教育は受ける必要がある」。

筆者 「この学校（ペンテコスタ派が運営している学校）に通う子供たちは地区の中で暮らす他の子供みたいにマサイ族としての儀礼を受けて戦士になったりはしないのですか」。

Bahati 「ない、絶対にない。学校が彼ら（子供たち）にとっての逃げ場なんだ。（割礼などの）悪い伝統から守れる唯一守れる場所が学校なんだ」。

Eric 「自分もマサイ族出身だが、子供たちに同じような思いをさせたくない。教育を通して自分は変わった」。

Bahati 「（公立学校に通う）周りの子供たちは本来学校に通っていなければいけない年齢の時に儀礼を行い、学校から離れてしまう。可哀想だ」。

このように、子供たちが将来独立して社会の一員となるために、まずは学校に通わせることが重要であるという認識の一致が身受けられた。カトリック教会のFather Albanoも教育の必要性、重要性については同一の意見を持っており、「（マサイ族の子供達は）平等な（教育の）機会を与えられていない現状がこの地区にはある。これまで耳が聞こえない子供達に適切な教育が施されて来なかった（Father Albano）」とし、自らが学校運営を始めた経緯について語った。しかし、筆者の「学校教育を促すことでマサイ族文化に変化をもたらすことについて、考えはあるか（筆者）」という

問いに対しては「文化を変えさせることが目的じゃない。基礎知識として生きていく上で必要な学力をより多くの人々が平等に受けられること重要である（Father Albano）」とし、学校運営の方針においても2つの教会で見解の差異がみられた。

学校教育に関して肯定的な意見を持っているのは教会や学校を運営している人だけではない。確かに学校教育が伝統的な慣習や風習、価値基準というのを変化させるというマイナスの側面を持つことは否めないが、コミュニティや文化の存続のために学校教育で得た知識や技術を還元することでさらなる地域の発展と文化の保全に繋がるプラスの一面も併せ持つこともある。Arushaの大学を修了し、教員免許を保持しているエンデュレン出身のJohnは次のように語った（以下カッコ内は筆者補足）。

John 「（2017年9月時点で）今のような乾季の時期は家畜を育てるために必要な餌がなく、人々は食料の調達に苦しんでいる。自分たちの家族を養うために我々は現金でものを買う必要性が出てきた。しかし、現金を調達するには仕事が必要。そして仕事をするためにはある程度の学力がないと雇ってもらえない」。

筆者 「（雇用や食料の確保など）問題となっていることは全部繋がっているんですね」。

John 「そう。その他にももう一つ問題があって、それは政府によって土地を奪われて強制移住させられる人々だ」。

筆者 「彼らにも教育が必要になるということですね」。

John 「もちろん。もしも移住させられた先が学校教育の行き渡っている地域で周りの人がみんな教育を受けた人達だったら、そこで生活を送るのが厳しくなるでしょ。我々は常にそういった恐怖と一緒に過ごしているんだ」。

他にも「政府と交渉するために学力は必要だ（Elikana）」、「子供により多くの教育を受けさせて良い生活を送ってほしい（Mirium）」と語る住民がいるように、学校教育の必要性を訴える人々も少なからず存在する。また、筆者がインタビュー対象者全員に「今後エンデュレンで必要な支援があるとすれば何が最も重要か」と聞いたところ、複数回答する者もいたが「教育」をあげたのは全体の75%に当たる12人であった。

学校教育に関する意見が住民の間で分かれる中、一概に当該社会における教育の是非を議論することは容易なことではない。しかし、マサイ族が「教育」の中に見いだすものとして、将来への「恐れ」と「期待」が混合しているのは明らかとなった。彼ら自身、時代の流れで訪れた学校教育の普及と伝統的な慣習の間で「葛藤」している姿がそこにはある。また、これまで世帯の中で絶対的存在であった「父親」と、学校で新たな価値観を教えてくれる「教師」のどちらを信じればいいのか、子供たちはわからないでいる〔野村・澤村 2013: 7〕。今後、さらなる児童数の増加が見込まれる両教会の学校においては、外部の価値観を横流しに持ち込むのではなく、コミュニティの意見を反映させた学校運営に努めることが課題としてある。

(3)教会に対する住民の戸惑い

学校教育やその他のプロジェクトを通して両教会はエンデュレンに少なからず、文化的な側面で影響を与えてきた。それは必ずしも全員に対してプラスの影響ではなかったかもしれないが、それぞれの教会が持つ特性や方針に共感する集団にとっては価値のあるものとなっていた。一方で、住民の中には教会に対する戸惑いを抱く者もいた。例えば、James はペンテコスタ教会が運営する孤児院に対して、「孤児院の運営は、多くのマサイの孤児のためになっていて、コミュニティとしてすごく助かっている。だけど、僕らの文化を否定されている部分は好きじゃない」と語り、孤児院の存在を肯定しつつも、譲れない側面もあることを主張していた。伝統的な暮らしを送っているマサイ族の彼らにとって、そこで起きているあらゆる社会問題に対して最良のアプローチが取れないもどかしさは存在している。学校や病院施設が足りない場合も、十分な資金と技術がないため、外部の団体の力を借りる必要がある。他にも、女性により社会に出やすい環境を望んでいても、男尊女卑の文化が根強く残るコミュニティにおいてはそれを主張することさえできず、やはり外部から来た教会やその他の団体に頼らざるをえない。

カトリック教会とペンテコスタ教会がエンデュレン内において対立構造にあるのが、住民が抱えるもう1つの懸念点である。前述した通り2つの教会はエンデュレンの中で似たような活動を展開している（表6）。

表6 カトリック教会とペンテコスタ教会の活動と開始年

	カトリック教会	ペンテコスタ教会
教会設立	1970 年代	1993 年
ホステル運営*	2000 年	2017 年
学校設立	2017 年	2011 年
資金源	住民や外部からの寄付	住民や外部からの寄付

(出所：インタビュー調査に基づき筆者作成)

*ここでいう「ホステル運営」は外部からくる調査団体や政府の人が宿泊する施設を指す

カトリック教会とペンテコスタ教会はどちらも、エンデュレンやその周辺地域のマサイ族コミュニティの発展、並びに外部からのさらなる支援誘致を活動の目的の1つとしている。しかし、両教会はお互いの活動を認識しつつも、まともに対話をこれまで行って来なかった。筆者はエンデュレン滞在中、カトリック教会のホステルに拠点を置き、宿泊場所と料理を提供してもらいながらフィールドワークを行っていた。ペンテコスタ教会が運営する学校にも何度か訪れ、職員や子供たちと接していると Sadera に「どうしてあそこ（カトリック教会）で寝泊まりしているんだ。私たちのところにもホステルはあるし、料理もちゃんと提供できる」と強い口調で言われ、両教会がいい関係を構築できていないが明らかとなった。エンデュレンに長年住む Kimani も「カトリック教会とペンテコスタ教会はお互いを敵対視している。私たちには理由がわからないが、いつも別々に寄付金のお願いをしてくる」と語り、同じ教会という立場で目標としていることも一緒のはずの2つの団体が協力せずに活動を展開していることに疑問を抱いていた。両教会は可能なかぎり、自分の教会に資金を集め、さらなる活動の発展につなげようと取り組んでいる。しかし、その姿はまるで「ビジネス」を行っているようでもある。教会という立場であるため、営利目的の活動は制限されており、いかにして外部の来訪者を自分たちのホステルに泊め、寄付金

を集めるかに必死になり、同じような活動をしている他の団体をライバル視するに至っているのである。

6. マサイの選択 –伝統文化と近代化の葛藤–

これまで、エンデュレンで2つのキリスト教教会が展開してきた活動とそれに対する住民の「語り」をもとに教会が与えるコミュニティへの影響について考察してきた。また、分析を進めていく中でマサイ族の住民が伝来の自分たちの文化に強い愛着と誇りを抱いていることも明らかとなった。服装や学校教育に関する議論からも、外部の影響で自らの文化が変わることへの抵抗感と、伝統文化を維持したいという感情が表れ、「マサイ族らしさ」を崩さないように奮闘する姿がそこにはあった。

しかし、現代のマサイ族には外部団体が行う取り組みとの関わり以外に、コミュニティ内での問題が生じている。外部から来た教会や NGO が行う活動によって伝統文化が変わっていく過程が「外からの近代化」であるとすれば、今課題としてあるのが「内からの近代化」である。つまり、外部からの直接的な影響ではなく、マサイ族コミュニティ内から内発的に近代化の道へ近づいている現象が起きているということである。住民の間で「マサイ族らしさ」に対する意識の差が生まれ、それがあらゆる場面で顕著に表れている。そして、人々が伝統文化をこれまでと同じかたちで継承していくのか、それとも新たな「マサイ族らしさ」を創造していくのか、という選択で1つの基準となるのがキリスト教である。多くのマサイ族がキリスト教徒になっていく中で、自分が信じる教えが伝統文化と相容れない関係になり、正しい選択がどちらかわからない状況に陥る。これから社会の中心となる青年や、青年を引退し長老となった若者にその葛藤は多く生まれ、コミュニティの中で意見が分かれるのである。

マサイ族にとって儀礼は人生の節目で欠かせない行事であり、古くから受け継がれてきた文化の1つである。普段は西洋的な格好をしている人も儀礼の時には、シュカとアクセサリーを身に付け、「正しい方法で」儀礼を執り行う。マサイ族にとってこれらの儀礼は、自らを「マサイ族」と認識する重要な役割を果たしており、昔から伝えられてきた手法で儀礼を行うことで、そのかたちを変えることなく後世に伝承していく、つまりはマサイの文化を守っていく意味合いを持つ。Agustino も「マサイ族文化の中で一番変わってはいけないものは伝統的な儀礼だ」と語り、その重要性を強調していた。

しかし、近年顕著に見受けられるキリスト教徒の増加により、儀礼を行わなかったり、受け継がれてきた手法で執り行わない「伝統離れ」が起きている。その多くが、キリスト教の教えに反しているという理由で、伝統的な方法で儀礼を行えば、それは神に背いている事と同義であると感じているのである。若者の「伝統離れ」とキリスト教の影響を調査していく中で、それぞれの信仰と儀礼に対する見解から、彼らを3つのカテゴリーに分類することができた。1つは非キリスト教徒で、伝統に重きを置き儀礼を行うグループ、2つ目はキリスト教徒でありながらも文化を維持するために伝統的な手法を用いて儀礼を行うグループ、そして3つ目はキリスト教徒で、キリスト教の教えに重きを置き儀礼を行わない、もしくは新しいやり方で行うグループである。1つ目と3つ目のグループはそれぞれ、宗教も異なり生き方や考えに違いが出ることは理解できる。しかし、第2グループに属する人々は、キリストの教えを信じながらも伝統を重んじる、いわば中立的かつ曖昧性をもちあわせた集団と言える。この第2グループに属する Mepu は年齢階級が変わる最後の儀礼の際に「周りの（キリスト教徒の）友人になんで儀礼を（伝統的なやり方で）やるんだ、お前もクリスチャンだろと言われたけど、自分の文化が好きだからやる。マサイ族としてやらなきゃいけない最後の儀礼だからやらせてくれ、と伝えた」（カッコ内は筆者補足）と語る。同じく第2グループに属する John に筆者が「なぜキリスト教徒になったのか」という問いを投げかけると「教会のおかげで今の自分がある。教会からのサポートがなければ学校にも通えなかったし、その頃から自分はキリスト教だ」と語り、教会が行っている活動に恩恵を受けた者たちがそのままキリスト教徒になるケースもあることを指摘した。

7. 「マサイ的近代化」の模索

以上、インタビューとフィールドワークを通してエンデュレンにおけるキリスト教の影響とマサイ族文化の近代化との関係性について検討した。学校教育によってもたらされる地域全体への利益を理解しつつも、伝統教育との折り合いを付けきれない様や、新たな技術をコミュニティに取り入れつつも古くから伝わる古典的な方法で生活を営む姿は伝統文化と近代化の間で暮らす葛藤そのものの表れであった。森部が指摘するように文化が他の文化と接触した際に、その隅々まで完全に密着して連関するものでなく、それぞれの文化が一定の時間の中で継続されながら変化するものである

とすれば、今まさにエンデュレンで起きている事象はこれに当てはまる〔森部 2001:103〕。Agustino が「伝統文化の変化を止めることはできないが、そのスピードを緩める努力はできる」と語るように、彼ら自身も時代の流れとともに伝統は変化していくものであることを認識し、その中でマサイ族としてどう生きていくかの選択を迫られているのである。

異なる2つの文化が接触するとき、それぞれの文化は3種類の働きをみせる。1つはそれぞれの文化が対立してお互いが他方との差別化を図るために溝が深まり極端な対立構造が生まれる動き。これは2つの文化が接触したときの初期段階での働きであろう。2つ目は一方の文化がもう片方を統合する形で単一の文化へと姿を変える働きである。これは文化の帝国主義とも言われ、主にグローバル文化がローカル文化を包括する形で作用する〔トムリンソン 2000:141〕。3つ目が長い期間を経て2つの文化がそれぞれの要素を組み込んで融合された1つの文化となる働きである。遠藤はグローバル化の中で展開されるローカルの変容とは、あるグローバルな文化が消費・実践される具体的な場における絶え間ない差別化と正当化のプロセスの諸相であるとし、グローバル文化がローカル文化と交わることでこれまでとは別のローカル文化が新たに姿を変えて誕生することを指摘している〔遠藤 2007:236〕。世界中に広がる文化が、今回の場合キリスト教が、西洋的なかたちを変えずに当該社会に埋め込まれることはなく、現地の人々の実践を通してそのコミュニティにあったものへと姿を変えていくのである。つまりは、エンデュレンにおける近代化とは、一般に語られる西洋的な近代化とは異なり、そこに住む住民たちによって新たに作り出される「マサイ的近代化」なのである。そして「マサイ的近代化」を達成するうえで欠かせないのが、地域コミュニティと2つのキリスト教教会の連携である。

現状は、コミュニティ内でも意見が分かれ個人単位で近代化の選択を行っている。そして2つの教会もそれぞれの手法で行い、対立が起きている。西欧的な近代化の波に飲み込まれずに、多くの住民が望むように彼らが「マサイ族らしい」マサイ族であり続けるために住民1人1人の意識の変革が問われている。

第5章 結論

本稿では、国家の中でマイノリティ的存在である先住民族を取り上げ、現代における途上国開発と彼らの文化の変化に関して議論してきた。数ある先住民族の中でも、世界的に有名な民族の1つで、近年メディアに多く取り上げられ、観光の対象ともなっているマサイ族の事例を扱った。マサイ族の歴史と伝統文化、一般的な近代化に触れたのち、タンザニア北部エンデュレン地区における近代化とその要因、また変化の担い手について議論した。まず第2章では、議論の前提として「先住民、先住民族」の定義の変遷に着目し、言葉によって排除、包括される集団がいることを指摘し、現代においても統一の定義が定められていないことが明らかとなった。しかし、先住民自身の「主体性」がより重視されるようになり、これまで以上に多くの民族集団が先住民としての権利を主張しやすくなったことがわかった。さらに、先住民と開発や援助に関する事例を取り上げ、先住民族がどのように開発の影響を受けてきたかについて明らかにした。これまで先住民族が抱えていた課題の多くが政府や国際機関などの大きな組織によって一方的に意思決定された開発プロジェクトに巻き込まれ、「被害者」となっていることであった。先住民族の権利や文化を保護するため、いかにして外の開発主体から内側の文化を守るかということに議論の中心があった。第3章では、マサイ族の文化について触れ、その伝統様式と人々の意識に着目して議論を行った。シュカは彼らにとって単なる伝統的な服装ではなく、自らの文化を表に現すために用いられる表象でもあった。また、伝来の儀礼に対する想いはとても強く、特に割礼の儀礼は少年の憧れであり、家族や地域の誇りでもあった。マサイ族の男性が自らをマサイ族と一番意識するのがこの儀礼を行う時である。少年から青年へ、そして青年から長老へと年齢階梯を変化させていくごとに与えられる新たな権利と役割が、マサイ族としての責任となり、「真のマサイ族」へとになっていく。このようにマサイ族にとって1つ1つの文化的要素が彼らのアイデンティティとなり、「マサイ族らしさ」を表すものとなっていた。グローバル化とともに外からの影響でマサイ族文化がどのように変化していくかを議論するために第4章ではエンデュレン地区に住むマサイ族集団に

焦点を当て、そこで展開される近代化とマサイ族の葛藤について考察を行った。

まず、文化の変化が起きた要因としてあげられた「キリスト教」と「学校教育」がこれまでの途上国開発における先住民との関わりで課題としてあげられているものと性質が異なることを示したい。従来議論されてきた途上国開発や近代化における先住民族の問題は、常に先住民族と開発主体という2項対立が存在しており、それぞれの役割が明確であった。開発の担い手が経済的利益を優先し、国際機関や政府の援助を受けながら事業を展開していった結果、社会的にマイノリティな存在である先住民族は強制移住、資源や土地の損失などの被害を被ってきた。その後、現地住民との対話を通して双方が被害を被らない開発が進められたが、本稿で述べたマサイ族の例のように言語の障壁から、まとまった議論がなされないままに、ここでも一方的に開発主体が先導する取り組みが行われた。もちろん、現代においてもこのような開発側と先住民族の間に生じる衝突は起きているが、新たに先住民族間での衝突が生じていることが今回の研究で明らかとなった。先住民族コミュニティ内で発生した衝突は「伝統文化」を重んじる集団と「西洋的な近代化」に進む集団とに分かれ、地域に根付く文化活動にも影響を与えていた。要因としてあげられた学校教育とキリスト教はどちらも人々の思想や価値観にプラスにもマイナスにも影響を与え、個々の受け取り方で伝えられたことに対する対応も異なっていた。つまりは、コミュニティ全体が均一に学校教育やキリスト教の影響を受けたのではなく、個人の経験と実践で受け取り方に差異が出ていたということである。

学校教育は国際社会の動向を踏まえ、政府の指導で初等教育の義務化が図られ、親は子供を学校に通わさなければいけなくなった。西洋的な学校教育の方針に基づき、科目は英語、算数、理科、社会、スワヒリ語、インターネットコミュニケーションなどを教え、黒板を用いて授業は行われる。さらには保健や道徳の授業もあり、そこで子供たちは「正しい」治療方法や結婚、男女平等の意味について学ぶ。しかし、これらはマサイ族が伝統的に続けてきた大人から子供に対する「教育」では教えられてこなかった内容で、一部の項目はマサイ族文化に反するものとなっている。学校教育を受けた世代と受けなかった世代で価値観が共有されていない現状がそこには存在し、住民の間で世代ごとの意見の相違が現れている。

キリスト教は毎週日曜日の礼拝においてその教えを説き、人々を「正しい」生き方をすることを訴えかけている。マサイ族が行う伝統的な儀礼は、キリスト教の価値観

から見ればタブー視されるものが多く、キリスト教徒が増加する社会の中で伝来の儀礼の形態が崩れることが一部の住民から危険視されている。キリスト教を信仰する人の中でも伝統文化に対して誇りと憧れを抱き、従来の形式を重んじる集団と、伝統文化の前にキリスト教の価値観を置き、新しい形で文化を継承していく集団とに分かれ、同じ世代間でも意見の相違が顕著に現れていた。そして、エンデュレンではこの学校教育とキリスト教が同じ現場で繰り広げられている。キリスト教が運営する学校が2校存在し、そこに通う児童らはキリスト教の教えに沿った学校教育を受けている。

エンデュレンのマサイ族にとってキリスト教と学校教育はどちらも排除できない西洋的な文化であり、今や社会の一部になりつつある。そこで彼らが模索しているのが「マサイ的近代化」である。外部から流入した思想や社会システムをそのままコミュニティに取り入れ、文化の一部としてくのではなく、彼らなりに自らの文化と近代化を改めて見直し、独自の近代化を歩むことが求められている。

本稿で取り上げたマサイ族の事例は、これまで議論されてきた先住民問題とは異なり、「外からの開発」のみならず、「内からの開発」の側面を有していた。開発の「被害者」として捉えられてきた先住民族問題において、改善の余地は常に開発の担い手側にあったが、先住民族が主体的に開発によって生じる近代化への道を歩もうとしている今、改めて自らの存在を確認しなおし、それぞれの先住民コミュニティがどう開発の波に対処していくかがこれからの課題となる。

注

- (1) 国連先住民族作業部会は国際連合人権委員会の下部組織である国際連合人権促進保護小委員会の6つの作業部会の1つとして1982年に設立された補助機関である。
- (2) 国際連合ウェブサイト「先住民への差別問題に関する報告書」
http://www.un.org/esa/socdev/unpfii/documents/MCS_xxi_xxii_e.pdf (2018/1/15 参照) より。
- (3) 枢軸国とは第二次世界大戦時に日本、ドイツ、イタリアの三国同盟国側で連合国を相手に戦った国々。主な国として、フィンランド、ハンガリー、ルーマニアなどがある。
- (4) 南北問題とは、1960年代に顕著に現れた先進資本国と発展途上国の経済格差を巡る問題。先進資本国の多くが地図上で北側に、発展途上国の南側に偏っているからこの呼び名がついた
- (5) コロンボ・プランとは1950年に提唱された、アジアや太平洋地域の国々の経済や社会の発展を支援する協力機構のことで、第二次世界大戦後もっとも早く組織された、開発途上国のための国際機関。
JICA 独立行政法人国際協力機構ウェブサイト
<https://www.jica.go.jp/aboutoda/basic/01.html> (2017/1/14 参照) より。
- (6) EIC ウェブサイト <http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu061012.html> (2018/1/15 参照) より。
- (7) SDGs (Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標) とは2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030までの開発目標である。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから好悪性され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っている。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自信が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本も積極的に取り組んでいる。

外務省ウェブサイト

http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/doukou/page23_000779.html (2017/1/15 参照) より。

(8) Tanzania National Bureau of Statistics ウェブサイト <https://nbs.go.tz/> (2017/1/15 参照)より。

(9) 1,000 シリングは 2018 年 1 月時点で日本円に換算すると約 50 円。参考までに、物価は日本より安く、通常の水が 1 本 250 シリングから購入できる。

(10) カトリック教会が行った調査に基づくデータの使用は、あらかじめ調査責任者に許可をいただいている。

(11) PTR (Pupils Teacher Ratio) は教員一人当たりの生徒数の割合を示す数値で、日本の平均は 18.1 とされている。

OECD ウェブサイト

[https://www.oecd.org/edu/Japan_EAG2013%20Country%20Note%20\(JPN\).pdf](https://www.oecd.org/edu/Japan_EAG2013%20Country%20Note%20(JPN).pdf)

(2018/1/15 参照) より。

(12) OECD (Organization for Economic Co-operation and Development : 経済協力開発機構) とは先進国間の意見交・情報交換を通じて、1) 経済成長、2) 貿易自由化、3) 途上国支援に貢献することを目的としている。OECD 加盟国は EU 加盟国の 22 か国とその他、日本やアメリカ、カナダ、オーストラリアなどを含む 13 か国の計 35 か国で構成されている [経済産業省 2016]」。

(13) OECD ウェブサイト <http://dx.doi.org/10.1787/eag-2017-en> (2018/1/15 参照) より。

(14) 筆者がインタビュー対象者の母語であるマー語を習得していないため、調査のほとんどが対象者の第 2、第 3 言語である英語を用いて行われた。また、英語話者でないインタビュー対象者については、現地出身の友人に英語通訳、スワヒリ語通訳を依頼したため、言語の面で表現に困難があったり、通訳者というフィルターが存在していたことにあらかじめ言及しておきたい。また、同じマサイ族であってもコミュニティごとでその様相は異なり、共有されている価値体系も異なる。そのため、本稿で言及しているマサイ族に関する情報は、引用しているものを除いて、筆者がインタビュー調査を経て得られた情報であることにも言及しておく。なお、今回のフィールドワークにおいて筆者の滞在期間の短さや言語面での制限から、インタビュー数の少なさや、対象者の偏りなど

の問題が残った。

- (15) NCAA とはンゴロンゴロ自然保全委員会 (Ngoro Ngoro Conservation Authority) を指す。ンゴロンゴロ地域内における先住民とタンザニア人に持続的な利益をもたらし、世界のために自然と文化と歴史的資源を保全することを目的としている。

NCAA ウェブサイト

<https://translate.google.co.jp/translate?hl=ja&sl=en&tl=ja&u=http%3A%2F%2Fwww.ngorongorocrater.org%2Fwelcome.html&anno=2> (2017/1/14 参照) より。

- (16) Arusha とはタンザニア北部の都市で、この詩を中心に 74 万人規模の都市圏が形成されている。ンゴロンゴロ地域を含む北部の観光地に近いことから多くの観光客がアルーシャ近郊のキリマンジャロ国際空港を利用する。

National Bureau of Tanzania ウェブサイト <http://www.nbs.go.tz/> (2018/1/15 参照) より。

- (17) 社会的自立とは「他社と連携・協働しながら、生涯にわたって生き抜く力や地域の課題解決を主体的に担うことから [文部科学省 2014] を身につけることを指す。

参考文献

April R. Summitt

2002 Cell-Phones and spears: Indigenous Cultural Transition Within the Maasai of East Africa, *Indigenous Nations Studies Journal*, Vol. 3, No. 1, Spring 2002

池谷和信

2006 『現代の牧畜民：乾燥地域の暮らし』古今書院。

河合香吏

2000 「マーサイ」綾部恒雄監修『世界民族辞典』弘文堂。

経済産業省

2016 「OECD とは？」

http://www.meti.go.jp/policy/trade_policy/oecd/html/ (2018/1/15 参照)

菊池京子

2001 「国際開発援助の理念と実態」菊池京子編『開発学を学ぶ人のために』pp.34-58、
世界思想社。

岸上伸啓

2009 『開発と先住民』明石書店。

湖中真哉

2006 『牧畜二重経済の人類学 ケニア・サンプルの民俗誌的研究』世界思想社。

マヌエラ、T・リー、S

2002 『先住民の権利 –ILO 第 169 号条約の手引き』苑原俊明・青西靖夫・孤崎知

己訳、論創社。(Manuela Tomei and Lee Swepston Indigenous and tribal peoples : a guide to ILO convention No.169

目黒紀夫

2014 『さまよえる「共存」とマサイ ケニアの野生動物保全の現場から』新泉社。

文部科学省

2014 「社会的時散ると社会参画の力を育む教育」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shukensha/index.htm (2018/1/15 参照)

森部一

2001 『文化人類学を再考する』青弓社。

根本利通

2015 「観光」栗田和明、根本利通編『タンザニアを知るための60章 第2版』pp.118-123、明石書店。

野村理恵・澤村信英

2013 「ケニアにおけるマサイ女子生徒の学習動機 -小学校教師の役割に着目して-」広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第16巻 pp.1-14。

Omolewa, M.

2007 Traditional African Model of Education: Their Relevance in the Modern World.
International Review of Education 53:593-612

Philips, J.S. & Bhavnagri, N.P.

2002 The Maasai's Education and Empowerment: Challenge of a Migrant Lifestyle.
Childhood Education 78(3):140-146

孫 暁剛

2012 『遊牧と定住の人類学 -ケニア・レンディール社会の持続と変容』昭和堂。

Spencer, P.

1993 Becoming Maasai, Being in Time. In Spear, Thomas and Waller, Richard(eds.),
Being Maasai: Ethnicity & Identity in East Africa, pp.140-156, Oxford: James

Currey, Dar Es Salaam: Mkuki na Nyota, Nairobi: EAEP(East African Educational Publishers), Arhns: Ohio University Press.

2003 *Time, Space and the Unknown: Maasai Configurations of Power and Province*, London: Routledge.

2004 *The Maasai of Matapato: A Study of Rituals of Rebellion*, second edition, London: Routledge.

Sperling, L.

1987 *The Labour Organization of Samburu Pastoralism*. Ph.D. dissertateion, McGill University, Montreal

上田元

2011 『山の民の地域システム -タンザニア農村の場所・世帯・共同性-』 東北
大
学出版会。

上村英明

2001 『先住民族の「近代史」 植民地主義を超えるために』 平凡社。

Summary

Selection of Maasai

-Impact of Religion and Modernization in Endulen, Tanzania-

Many scholars in different fields have long discussed impacts of development or modernization on indigenous people. In most of the cases, tribes that have been treated as minority in the society have suffered unpleasant side effects of development mostly run by a large international company, government, or international organization such as World Bank and United Nations. People were chased away their homelands and were unable to remain their traditional cultures and lifestyles as well. Maasai tribe was also a victim of modernization, which has caused them to spend their lifestyle only in one place instead of moving around the area seeking for good grass for grazing like they used to do before.

Maasai practices various traditional customs including wearing of shukaa, circumcision and other ceremonies. Their social structure is also unique when compared to western cultures. Those cultures have been continually passed down from one generation to another without changing its forms. Every one of their cultures including ones mentioned above makes Maasai as “Maasai”. However, Maasai tribe in Endulen, Tanzania is now in a challenging face with spread of school education and Christianity. As an effect of those factors,

some group of people are now seeking for new style of Maasai culture that reflects ideas and philosophy of Christianity and school education, which has caused separation among villagers.

It was formerly a confrontation between indigenous people and developers who brings western cultures and modernity to the society. However, as shown above development toward modernity, or putting distance to their own culture, is now happening inside community by the people who lives within. To maintain their cultures in traditional way, re-understanding own culture and discussing which way of modernization the community pursue must be done. We, as a man who holds own cultures, are all responsible for every action we take in the context of designing the “ideal society” for everyone.

謝辞

本稿の執筆にあたり、非常に多くの方のお力添えをいただいた。この場を借り、感謝の意を示したい。

まず、本稿の執筆に際して多くの助言とご指摘をいただいた関根久雄教授にお礼を申し上げたい。関根先生には本稿の執筆以外にも、2年間ゼミ生としてお世話になり、途上国開発を人類学視点から考察する上で必要な視点や知識をご教授いただいた。また、関根先生のその独特な雰囲気と冷静かつ的確なご指摘により、毎回のゼミを楽しく、実りにあるものにすることができた。このゼミで学んだことは今後の私の活動において欠かせないものであり、一生大切にしていきたい。

また、本稿の要であるインタビュー調査に協力していただいた方々にお礼を申し上げます。本稿執筆にあたり、インタビュー調査は欠かせないものであったが、知人を紹介してくれたり、通訳として現地の方とのコミュニケーションを円滑にしてくれた Mepukoli には感謝してもしきれない。マサイ族の基礎的な情報から調査対象地である エンデュレンに関する情報を快く提供していただき、インタビューを行う上で欠かせないパートナーでもあった。他にも、慣れない土地で現地の言語もままならない私に、優しく接してくれたエンデュレンの住民の方々にも感謝したい。彼らのおかげでフィールドワーク中の休憩時間をより充実したものにすることができたと共に、マサイ族文化に強い親しみと愛着を抱くことができた。

さらには、ゼミ生をはじめとする大学内の先輩、同期、後輩に感謝したい。本稿の

執筆で悩んでいるときに、食事に付き合ってくれて快く相談に乗ってくれた。また、他愛もない話をしたり、時には一緒にはしゃいだりしてくれたお陰で日ごろ抱えていた不安や悩みを解消することができた。本当にありがとう。

そして、ここまで育ててくれた親に感謝の意を表したい。私を焦らせまいと、執筆のことには一切触れずに、日々の楽しい出来事や愛犬の様子を写真に撮り、共有してくれた。その1つ1つが私にとっては癒しであり、心の支えとなっていた。そのような静かな優しさに感謝したい。ありがとう。

最後に改めて、執筆に関わってくださった皆様に感謝と敬意の意を表して、本稿の結びとさせていただきます。